

まず新米図書館長からひとこと 松村一男

2

座談会

「この図書館、もっと使えるぞ」

4

岩間暁子 堂前雅史 松枝到 山村睦夫 松村一男

教員アンケート

「わたしの研究と研究法」

17

浅見克彦	飯沼博一	伊藤武彦	岩城正夫	岩間剛一	岩本陽児	上野俊哉
上野正男	梅原利夫	加藤 巖	岸田 秀	吉川 信	小林弘明	小林 稔
櫻井 清	塩崎文雄	篠原睦治	津野海太郎	徳永潤二	長尾洋子	野中浩一
橋本 亮	前田耕作	松枝 到	松村一男	三浦郷子	三上 豊	三橋 修
三宅輝幸	村井 紀	山崎秀雄	山本吉左右			

図書館発、研究活動支援サービス案内

- ◎図書館員を使いこなす
- ◎施設・設備案内
- ◎研究動向を調べる
- ◎自宅から学内限定データベースを利用するには
- ◎データベースを効果的に使うためのヒント
- ◎資料入手サポートサービス
- ◎論文・記事を調べる
- ◎研究者情報を調べる
- ◎新聞記事を調べる

まず新米図書館長からひとこと

松村一男

前館長の津野海太郎さんは編集者としてもエッセイストとしても著名で、大学図書館の館長にまさに適任の方だった。その津野さんがもつと図書館に親しんでもらおうと提案して、実行したことのひとつが教員による読書案内だった。『本を読もう!』と題されたこの小冊子は、二〇〇四年に一冊目、翌年に二冊目が出され、受験生、新入生、在校生、職員、そして教員と、さまざまな世代にわたって今も広く愛読されている。意外な先生が意外な本を推薦していて、平素知らない一面を発見すると、けっこう新鮮な感じがする。

津野さんはこの成功に気をよくしてか、さらに次なるプランとして、それぞれの教員がどのように研究をし、その際にどのように図書館を利用し

ているかをエッセイにでもらおうと提案した。しかもそれに教員有志による座談会もおまけにつけてしまおうとした。その結果、生まれたのが今、みなさんが手にしている『わたしの研究法』なのである。

今回は三十二人の教員の皆さんがエッセイをお寄せくださった。もちろん、今回は締め切りに間に合わなかった方々もいらつしやるので、『本を読もう!』と同様に、第二弾を出せばいいなと願っている。エッセイを寄せてくださった教員の方々、座談会にご参加くださった方々、この企画を背後から強力に支えてくださった図書館職員のみなさん、そして津野さんに心から感謝いたします。

『本を読もう!』と同様に、この冊子も広い読者に迎えられ、学生、職員、教員の相互理解と友好がさらに一層促進される一助となることを願って、着任したばかりの危なっかしい新米図書館長からのことばといたします。



「この図書館、 もっと使えるぞ」

座談会



司 会 **松村一男** 館長 (イメージ文化学科)
出席者 **岩間暁子** (人間関係学科)
堂前雅史 (人間関係学科)
松枝到 (イメージ文化学科)
山村睦夫 (経営メディア学科)

図書館のサービスはよくなった

松村 きょうは「私の図書館利用法」ということで、四人の先生方にきていただきました。教員だけでなく、学生たちも「ああ、あの先生はこうやって図書館を使っているんだな」と興味を持ってくれることを期待しています。

山村 じつはこの大学に来たとき、はたして和光大学の図書館を自分の研究図書館として利用していけるだろうかということ、まさきに考えたんです(笑)。私は歴史研究が専門ですが、私が必要とする資料があまりにも少ないという印象がまずあったわけですね。その点は小規模大学の図書館が持っている課題ではないかと思います。

ただ、いい点もあるんですよ。最初の年だったと思いますが、『渋沢栄一伝記資料』という近代の企業研究・経済研究の基本文献で、六十冊くらいの、それな

りの値段のものなんですけれども、それを希望したら意外とすんなり入ったんですね(笑)。小さいだけに小回りがきく。その後も『日本外交文書』や『法令全書』などの大部なものを何年もかけて入れていただいて、基本的な資料に関しては、自分から積極的に要望していけば実現できるということがわかった。それがこの大学にきて印象的なことだったですね。

堂前 科学技術論の方面でいうと、たとえば以前、生物への放射線の影響をめぐる論争について論文を書くはめになったんです。放射線生物学や放射線医学については、ぼくは教育を受けたこともないし、読んだこともない。それであわてて勉強しなければならなくなったんですけど、ここの図書館にはそういう分野のものはありません。大学一、二年生程度のものが広く薄くあったりするとちよつと助かったと思うんですが、だ

いたいは凄いです。「どうしても必要なので入れてください!」というところ、いろいろアドバイスをしてくれて入れますし…。ただ、野外に出て仕事をする人間としては、どこの図書館でもそうなんです。図鑑類がレファレンス・ブック・コーナーにあつて、持ち出し禁止なんです。気軽に持ち出せない図鑑くらい使いにくいものはない(笑)。とまあ文句をいったら、新しく買った図鑑は普通の貸し出しできる書架に置いていただけるようになったし……。

岩間 図書館のサービスは全体として非常にフレンドリーになった気がしますね。だから、とりあえず相談してみると、なんとか手に入れようとしてくださるし、メールでの申し込みも受けてくださる。研究者の研究時間を確保するという点で、細かなことですけれど、とても助かっています。

松枝 ぼくはこの大学の学生だったんですが、むかし図書館はいまの教務課のと

ころにありました。書庫は奥の倉庫にあつて、非常に暗くて、人もあまりいなくて……。

やはり本は少なかったです。少なかつたけれども、他大学にはない変な本が偏つて充実している。注文するのとわりと買ってくれるので、きわめて不思議な本が入つてましたね。あとでコンピュータで検索できるようになつてから、和光大学に各国語のコーランが何種類あるか調べてみたら、古い英語版のコーランがあつて、だれがこんなの入れたんだろうと思つたら、小野忍先生だった。『ワーバグ・ジャーナル』(Journal of the Warburg and Courtauld Institutes) というのも当時は和光にしかなかった。以前、クエートから新聞記者が来たんです。アラビア語について日本の大学を視察したいといつてきて、そういう場合、ふつうは東京外語大なんですけども、なぜか当時の文部省は「和光大学の芸術学科資料室に行け」と。それで急いでアラビア語の本を

並べた。そういうことができる大学でもあります(笑)。

岩間 私の専門は社会学で、基本的には現代の資料を使うんですが、いま、いちばん利用しているもののひとつは、データベースの ProQuest (ProQuest Academic Research Library) なんです。現物を見たり、アブストラクトを探したり、この図書館にない文献は相互貸借や複写をしていただいたり……。もうひとつ、たまに事務長の沢里さんに「お願いした文献複写を取りに行く時間がないので配達してもらえるとありがたいんだけど」とちよつとお話ししたら、それもすぐにやつていただけるようになった。

堂前 親切だし、サービスはかなりいいほうですね。

松枝 他大学の図書館に比べて使いやすさというのはありますね。でも、北海道大学の図書館は閉架式ですが、入り口で頼んだら、何も聞かずに中に入れてくれました。

岩間 出身大学なのでときどき行きますが、あそこは奥に書庫がある。大学院生以上は、学外の人でも紹介状があればだれでも入れるので、実質的にはぜんぶ開架なんです。

松枝 閉架ではなく奥まった開架ね。ここに十八世紀なころに上海ででた石版刷り、秩入りの『全唐詩』なんかがどーんと置いてあつて。早稲田大学の中央図書館は一九七〇年頃から完全閉架だったときは、指導教官の退官と同じ年だったんですけど、「院を出たからといって、書庫に入れないのはひどいですよ」といったら、「おれも入れなくなつた」つていつてました(笑)。

山村 いまは書庫にも入れます。外部の人間でも紹介状があれば入れますよ。慶應なんかも、書庫などへも入れます。以前は大学図書館や研究所図書館は、紹介状を持つていけば、どこでも比較的自由に入れたんです。でも最近は情報管理と

いうことで、どこも入れさせなくなつてきています。それに戦中・戦前の資料が劣化しはじめたということがあつて、マイクロフィルム以外は見せたがらない。もうひとつは例の個人情報保護法ですね。**堂前** 出入館が集中管理されるようになったことも関係あるでしょう。

山村 予算があればどんなマイクロ化して、ネットにのせられるわけですが、それがなかなかむずかしい。マイクロ化が進めば、和光でもネットのシステムをどう充実するかということが課題となつてくると思います。そういう裏腹な関係ですね。大学の図書館はまだいいんですよ。ところが研究所の図書館になると、かなり難しい。スタッフがいらないということもあるのかもしれませんが……。

データベースの使い方

堂前 ぼくは図書館では雑誌しか使わないというか、しかも雑誌って各大学にす

べての分野が揃つているということはありえないので、もともと図書館にある資料を使うという発想がないんです。そもそも自然科学の場合、研究の材料が本じゃないんで、他の人の研究を参照するため、という位置づけになつちやいますね。自分の身近な分野の雑誌ひとつかふたつと、『Nature』とか『Science』があつて、それをたまにペラペラとめくつていけば、そんなに高いレベルは保てないけど、乗りおくれずにはすむ。

あとは岩間さんと同じで、データベースを検索してみつけた文献を文献複写で手に入れるというパターンです。その意味では、山村先生とちがつて、この図書館をどう自分の研究図書館として活用するかという点での多くの要求水準は、わりと低かった(笑)。

山村 史料的なものはどうしても他大学に頼らなければならぬ。ところが、バックナンバーの複写など、大量に資料が必要なときは相手の大学の業務に差し

支えるということもあつて、分けてお願いしないといけないので、実際にはなかなかお願いしにくい。せつかくネットでこれだけつながっているんだから、ほかの大学図書館とのあいだで、より効果的な提携のシステムができるいいと思うんですがね。

岩間 いまはどの大学もセキュリティがきびしくなつていて、その大学に所属している人でないとデータベースが使えなくなつています。そうなると自分の大学にデータベースがあるかないかが重要になつてきます。だから、ProQuest しかないというのでも困る。たとえば社会科学の分野で JSTOR というデータベースがあるんですが、ぜひそういったものも拡充していただきたいですね。

松村 念のためにお聞きしますが、いま皆さんがおつしやるデータベースというのは、電子化された学術雑誌、つまり電子ジャーナルの目次とアブストラクトとキーワードのデータベースのことですね。

岩間 いえ、最近のデータベースは本文を収録したものが増えていて、私が希望しているのは基本的に本文も見られるデータベースです。社会科学でいうと、ISTORでは、ここ百年くらいのものが本文データベースになっています。

堂前 会社ごとを持っているジャーナルがちがついていて、ある会社と契約するとそこが出しているジャーナルをすべて本文まで見られる。ただ自然科学の場合はアブストラクトが中心で、論文ですとMEDLINEという巨大なデータベースがあつて、アメリカがただで使わせてくれます。生物学系のアブストラクトは全部そこで手に入ります。そこからさらにリンクがはつてあつて、クリックすると本文があるところへ飛ぶ。無料の場合と有料の場合がありますが、金さえ払えば、だいたいは紙なしでやれますね。

岩間 研究のしかたが、この十年でずいぶん変わりましたよね。特に社会学系だと、アメリカでは図書館に行つて自分で

コピーすることはほとんどなく、データベースで検索して印刷しています。要約だけだと、取り寄せてみたら「これは使えない」ということがよくありますけども、全文型データベースなら、夜中でもその場で検索して本文まで見られますから、三倍くらい仕事が早い(笑)。思考が中断されずにすむですよ。

山村 それは学術雑誌に関してですね。古い雑誌や本はまだ電子化は進んでいない。

松村 自然科学や社会学の場合だと、新しい研究の動向を知るには論文が中心でしょう。本はほとんど読まない。

岩間 歴史や人文科学とくらべると、ジャーナル中心の面が強いかもしれませんね。

堂前 いままで自然科学だと、和文論文そのものがあまりないということもあつて、なかなかいいルートがなかったんですが、最近、ここでも医中誌(医学中央雑誌)というお医者さん方面のデータ

ベースが使えるようになった。ただ、ぼくらの分野でほしいのは医学的に正しい論文というのではなくて、むしろ「これは怪しいな」という感じの論文なんです(笑)。そういうものが手に入ると、いまのお医者さんや医療を受けている側の人たちの考えていることが浮かび上がってくるんですけどね。

松村 怪しい論文つて昔のものですか。いま書かれているもの？

堂前 いまのものです(笑)。だいたい一般医学書なんてインキキばかりですけど、インキキな本が出るということは、読者にとつても書く側の専門家にとつても、それなりのニーズや得なことがあるわけですよ。そのところを裏側からサーチしたいと思うと、MEDLINEに出るようなちゃんとした論文ではない論文がほしくなる(笑)。

松村 松枝さん、図書館をいちばんよく使う分野のご専門としては、どうですか。人文系はまたちよつと違うでしょう。

松枝 そもそも研究者ではないので(笑)、あつち飛び、こつち飛びなんで、分野なんでもはまつたくありませんから、何でも見ます。たとえば、ぼくがいま関心をもっているのは、「中国語エジプト起源説」ですね。

松村 はあ(笑)。

松枝 データベースでいうと、ぼくは論文よりも本で探す傾向が強いので、いちばん使うのはWebcat (NACSIS Webcat)です。データベースより知識と勘に頼るところがあつて、たえず聞き耳を立てているわけです。ある程度茫漠としたところから探そうと思うと、インターネットのサーチエンジンでクロス検索して、引つかかってくるのを待つ。たとえばデューラーについてどんな本があるのか、その中で版面について書かれているのがどれだけあるのかとか、という風に絞り込んでいく。そのときは専門サイトでですね。版画専門、彫刻専門、建築専門、というところをたずねてみる。そこで引つ

かかってくる面白そうな本を気に留めておいて、外国に行く機会があつたら手に入れてくる。

あと日本について調べるときの基本は『古事類苑』なんです。まずそういうものにあたつて、それから各書物にいく。ああいふ典籍の引用類でできたハードな辞書というのは、いまでも多用しています。それから平凡社の『東洋文庫』。科学、歴史、哲学、紀行、空想物語、いろいろな領域のものが入ってますけれど、ただ、それらがここの図書館では、分野ごとにばらばらに置かれている。それはいいんですが、一方で、この叢書は全体として何を考えているのかという総体を見たいという場合もありますよね。それを最初に痛感したのが『ローブ・ライブラリー』です。ちよつと補足しますけども、この図書館では、たとえば文庫本は一箇所を集めて置かれていますよね、それはまあ、サイズの問題なんでしょうが、それと同じで、この叢書には、ある時代

に書かれたいろいろな分野の本が、伝記も哲学も食べ物の本も、ぜんぶいっしょくたに入っているわけです。ところが、いまの和光の図書館の分類だと、食べ物の本は食べ物の本の棚、天文学の本は天文学の棚に行つてしまう。しかし、ある古い時代の文化を研究しようとする人だと、別々の分野に分かれているよりも一箇所にまとまつてあつたほうがいい、ということがある。二セット買えばいいんだけど、そこまで要求するのは無理だからね。

研究のための時間がない！

松村 これは意地の悪い質問かもしれないが、みなさん、ご自分の研究のほかに教育があるし、いろいろな学内事務があるでしょう。そんな中で、はたして研究にどのくらいの時間が割けるものなんでしょうか。わかりやすく一週間単位で、正直にお答えいただきたいのですが

(笑)。

松枝 基本的にゼロですよ(笑)。

堂前 学期中は、ほぼゼロじゃないかな。

松枝 学期中に一定のテーマに関する本や文献を集中して読むというのは、編集者に尻を叩かれているときだけ。あとはゼロです。つまみ食い程度はしますけども。

岩間 私は三〇から四〇パーセントくらい。かなり意識的に、そうしようとしています。

山村 ぼくは今は病気でいろいろキャンセルしてるんですけども、どうしてもというときで、三〇パーセントかけられるかどうか。授業の準備のほかに、会議やその準備のための時間がすごいかかって、資料をばらばらと読むだけで、それをひとつにまとめていくというようなことはできないですね。だけど、資料を機械的に読むだけでは、あとで頭から抜けていって、結局、ゼロになってしまいう(笑)。

松村 そこまで忙しくなったのはいつごろからですか。

山村 ぼくらの学部では結構早くて、七八年前かな。ひとつには入学試験の種類が増えてきて、高校訪問とか高校生への対応とか、そのための活動がうんと忙しくなった。あれからガラッと変わったで



写真左より、岩間、堂前、松枝、山村、松村(敬称略)

すね。それに付れて、大学の「生き残り策」とかの議論がはじまって、教員が研究時間をいかに充実させるかというような議論や要求が出しにくくなった。別に「研究するな」とはいわなくても、やれないようなことをたくさん要求するようになったでしょう。松枝さんなんかでも、学部長という立場上、自分で思っている、人には違うことを要求するわけですね(笑)。

松村 わたしはどちらかというと、「研究」というよりは「仕事」というニュアンスが強いですね。なにか新しいことをつくりだしていくのが研究だと思うのですが、そこまでなかなか集中することができないので、とりあえず出版の可能性があるものをなにかやる。そういう意味での仕事を毎日、授業と授業の合間とかにするようにしています。だからまあ努力目標ですね。それをしている自分がないと、ちよつと不安になってくる。教育者ではあるけれども、同時に研究者と

してのアイデンティティは持っていたいということなので、学内の仕事にはあまり力を入れず、むしろ研究に力を入れる自分でありたいと願っているわけです(笑)。そんなわけで会議が長びくと急に不機嫌になる。わたしのような飲まない人間でもそうなんだから、飲む人はもつと大変ですね(笑)。

松枝 ぼくは一日の三〇パーセントは酒を飲んでるわけですけども(笑)。

山村 これじゃまずいと思っけてても、学内のいろいろな業務をマジメにやるできない構造になっている。ぼくはいま自分で解決できないから、それがストレスでもあるんですけど、やっぱりみなさん、あまり寝てないんじゃないですか。

岩間 私は学期中は研究会に出たり、資料を集めたり読んだりする時間にして、夏休みや冬休みにまとめて書くようにしています。たとえば厚生労働省の科研は締め切りが厳しくて、四月に始まって、十一月にはもう、その年度にやったこと

岩間 やっぱり私生活ですかね(笑)。学内でも、この人は研究してるかしてないかって、雰囲気わかります。松村さんはよくされてる。わかりますよ(笑)。そういう人が、これは自戒をこめてですけど、和光大学の教員の中では少ないように思います。研究者である以上、忙しさを理由に研究放棄が許されてはいけないと思うんですけど。

松村 なんかキツイ話になってきたなあ(笑)。

岩間 大学全体が高等教育機関として研究なり教育なりで貢献しない限り、生き残りができないし、提携先だってなくなりますよね。いまこそ研究の面でも踏み

とどまらなければいけない時期だと思えます。

和光大学図書館を採点すると

松村 そんなわけで、教員も最近は、なかなか研究に充分な力をふりむけることができない。そこで研究基盤としての図書館をどう使っていくかですが、わたしはどうしても数値化に興味がありまして(笑)、みなさん、この図書館に対する満足度というのは何点ぐらいでしょうか。ちなみに、わたしはほとんど一〇〇点です(笑)。

松枝 一〇〇点といわざるを得ないね。火曜から金曜まで学校に来てて、家の本棚に触れる時間がない(笑)。

松村 ちよつと余談になりますが、わたしの場合は、限られた環境で何が生み出せるかという居直り式の研究が多いんです。ほんとの専門家というのは最新の研究データを取り寄せたりなんかして、あ

る分野について極めていくわけですよ。でも私はどちらかといえば、手持ちのコマ、基本的にはいま和光の図書館にあるような本の中で、この分野とこの分野を普通の人があまり考えないようなしかたでフュージョンさせて面白いものをつくってみる、そつちのほうが好きなんです。そこに居直って図書館の中にそういう楽しみを設けてみる、という意味で一〇〇点なんですけども(笑)。

山村 ぼくは逆に、自分のほうがもつと図書館を活用しなければいけないと思います。図書館の方たちは、ぼくが要求する以上にいろいろなことを調べてくださる。このあいだも、ある在外日本語新聞のマイクロフィルムがどこに所蔵されているか、世界中の図書館の所蔵状況を調べてもらったんですけど、結果として、どこの大学とどこの大学にあるのと同じだということまでがわかってきた。時間もいとわずに、こちらが要求する以上に細かく調べてくれたんですね。

むしろこちらのほうが、そういう機能や活力を活かし切れていないんじゃないかな。

松村 それは大学図書館としての基本的な役割だよな。

山村 一週間ぐらいかけて文献を探してくださって「ここにありました」と教えていただいたりします。やはり何点というのは、ちよつとおこがましい感じですね。

堂前 ぼくは八〇点くらい。疑似科学とか心靈研究とかの「トンデモ本」を批判的に読むということをプロゼミでやっているんで、だいたいの材料は図書館で手に入るようにしようと、インキ健康法の本の批判本なんかを入れてくれるようにお願いしてきた。ぼくが来てからだいぶ増えたんじゃないかな。「と学会」の人もこの図書館のデータベースを見ていて、「まだこの本が入ってないよ」と教えてくれるんです(笑)。

松枝 学生の中にも、大学の図書館で所

蔵している本は全部正しい本だという感覚があるでしょう。それはやつぱりまちがってる。本を信ずる、信じないということについてのクリテリア(基準)みたいなものを教えないといけないですね。**堂前** ぼくのプロゼミでは、だいたいネタが怪しいものですから、「両論併記して発表しろ」といっています。UFOだったら、それを信じる側と否定する側と両方の考え……。そうすると、さぼってどちらか片方しか用意してこない学生がいて、手に入りやすいのは信じてるほうの意見ですから、みんなのまえで大恥をかく結果になっちゃう(笑)。活字になつてるだけで信じちゃうんですよ。だからそれそのままコピーして配れば満点だろうというような発想になつてしまふんで、その意味では活字の疑い方というか、疑うための材料として図書館を使うというのも手かもしれないな。どこでしっつけ、ニセモノの美術館がありますよね。

松枝 以前、大英博物館で「フエイク」というテーマの展覧会があつて、わざわざ見に行きましたが、入り口に紀元前二千年紀につくられた紀元前四千年紀の彫刻のニセモノが展示してあるんですよ。

それだけで充分骨董品じゃないかと(笑)。で、出口にはルイ・ヴィトンが置いてある。みんな笑つてましたが、時間がたつとニセモノのほうがリアルティを持つてくることあるんですね。さつき「中国語エジプト起源説」に興味があるといいましたけれど、ウルドゥー語は日本語が起源だという戦前の超言語学もありますし……。

堂前 英語の日本語起源説というのがありますね。

松枝 その手のものは材料としてはとても有効なんです。ちゃんと教えないと信じちゃうから。

堂前 それを真に受けて卒論を書く(笑)。

松村 エッセイとか、もう少しやわらか

いものも増やしたほうがいいかもしれない。

堂前 文科系の学生に基礎的な自然科学の本を見ても、なかなか読まないですよ。その意味では、なるべくきれいな絵がいっぱいあるような本がいい。わたし自身、やはり若い頃はそういうところから自然科学に興味をもつたということがあるので、多少不正確でもいいから、そういうものを入れたほうがいいかもしれません。

岩間 「やわらかい」本は、新しくはじまった町田市立図書館との提携ですむんじゃないですか。むしろ市民のみなさんは「大学らしい」図書館を期待すると思うんですよ。わたしは川崎市に住んでますが、登録料を払うと区内にある大学を利用して、英語の専門書なども家に持つて帰れるんです。和光の図書館経由だと館内を見て、必要なところはコピーさせていただくという利用方法しかできないので、もし同じものが地元の大学に

あればそちらで借りちゃう（笑）。今後、公立図書館も自分の大学に準じた利用ができるようになれば、かならずしも和光大学で全部の本を持つという必要はないし、むしろ和光らしい特色を出していくために他で足りるものは他で済ますというほうがいいと思うんです。

松枝 松村さんやぼくだと、かなり古い出版物―戦前のもの、洋書だと十八世紀、十九世紀のものもぜひ見たい。そういうものをデータベースで探しても東大系にしかないわけで、そこと提携できるとは思わないですが（笑）、とにかく向こうに行けば見られるし、コピーぐらいはできるということもありますから。

山村 学生に口だけであれこれ言ってもだめだから、とにかく図書館に連れてきて書棚を見させる必要がありますね。ぼくの場合、企業史というか、社史のたぐいは学生たちが使えるようにある程度は揃えてもらわなければならない。社史なんて面白くもないのですが、ないと困

ります。ただ、その場合、たとえばトヨタだと機械などのところにあったり、ばらばらに置かれていて学生たちが使いこなせないという問題があります。大学図書館には学習図書館としての重要な機能があるにもかかわらず、図書館にかなり習熟していないと、基本的な学習用図書すら使いこなせない。なにか解決の方法がないかと思えますね。

松枝 表現学部では来年度から「基礎力ゼミ」という入門ゼミを全員に課すことになっていますが、そこでは図書館利用法と検索法については、実地も含めて必須にしてやるつもりです。いまでも、ひとりひとり違うテーマで演習的にやるときには、関連する本をそれぞれ指定して、次の週までに持つてこさせるとか、強迫観念みたいにして図書館を使わせていますけどね。

山村 最近はレポートはネットでしか調べなくなっていて、ダウンロードしたものをそのまま提出する学生までいる。国

会図書館の雑誌の検索の仕方とかも教えるのですが、やはり一緒に現場に連れて行って、雑誌でも本でも、ここにこれがあるというふうによつてはじめて学生たちにも図書館というものがわかるんですね。

堂前 ぼくはフィールドワークの授業で、毎回、大学周辺の動植物を採ってきて調べるといふのをやっていて、それを確実に調べるための図鑑をひと冊かふた冊分、ごそつと持ち出すというのをやっています（笑）。それを学生にやらせるわけですが、図書館に行くと聞いただけでこなくなっちゃう学生もいるんです。もつと敷居を低くできないかなと思いますね。

山村 ぼく自身は、ゼミやグループ単位で昼休みとかに図書館に連れてゆく時間というのは、以前にくらべると格段に減つてます。時間がないですね、忙しくて、よくないですね。松枝さんのゼミでは、行けといわれれば学生は行くわけですね。

松枝 いや、そういう学生しか残らないんです（笑）。

これからの図書館に なにができるか？

松村 もうひとつ、情報発信基地としての図書館という問題がありますね。所蔵資料をPRするほかに、和光にはこういう先生がいて、こういう研究がされています、こういうことを問い合わせたらわかります、というようなことを外部に向かってPRしていく必要があるでしょうね。

岩間 よその大学を見ると、先生方にいい教育をしてもらつて、その教材やレジュメや動画を図書館が集め、それぞれの大学の教育機能の充実をPRしている。図書館が大学における知能の拠点になるということですね。図書館だけではむずかしいと思いますが、研究所や情報センタ―と連携して、ぜひ積極的に推進して

いただきたい。アメリカの大学図書館では、一年生や二年生向けに、論文を書くとき勝手に他人のアイデアをとつてきちやダメですよ、かならず出典を示すんですよ、というようなことを、わかりやすい漫画などを使ってホームページ上で載せています。作成にはおそらく教員がかかわっていると思いますが、これからは、そういうことも重要になっていくんじゃないですか。

山村 たとえば大学史の編纂という課題があるんですが、図書館と研究所が共同で「大学史編纂室」を設置できるといい。

岩間 それと研究所がサポートしている共同研究のレベルが必ずしも高くないでしょう。基本的には予算を配分して、それで終わつてしまっている。それが大学の知的パワーの向上につながっていないところがあると思いますね。

松村 それは研究者自身の問題であつて、それを図書館とどうつなげるかですよね。
岩間 たとえば重点研究のように特色が

あるものがあつたとき、共同研究の成果を図書館で蓄積するとか……。

山村 すでにマイクロフィルムなど、いくつかの共同研究の成果や収集資料が図書館に入つてます。ただ、その研究が終わつたら、そのまま死蔵されてしまう。使われていないんです。それがひろくオープンになることで、事実上の共同資産になるという可能性はたしかにあるでしょうね。

それともう一つ、これまで和光大学の図書館としての独自のコレクションについてのポリシーがなかったでしょう。家永訴訟の資料とか、小野忍先生の小野文庫だとか朝鮮資料だとかありますが、どれも寄贈されたもので、独自のものではないですよ。

岩間 たとえ寄贈されたものでも、共通するコンセプトがあるならば、それを積極的に公開していくことがまず必要だと思います。あるものをもつと表に出すべきではないかと思えます。

堂前

それは図書館だけが決めるというよりも、研究とのリンクですよね。こういう研究者がいるので、結果としてこういう本が充実していく。「二ワトリと卵」的なことではあるんですが。

山村 いま和光大学の研究所は「総合文化研究所」ということで、おしなべて全体に、というふうになっていくわけですね。それに対して特定研究といった形で柱を立てることが可能かどうか。創設時に、あえて「アジア研究所」という形にしなかったという歴史がありますけれども、今後は三つくらいの柱で、和光大学の核になるような研究を打ち出すべきかもしれない。図書館の場合も同じような問題があると思うんです。

松枝 やつぱり「目玉」は持つべきなんです、たとえば「アジア研究五ヶ年計画」みたいな柱を立てて、イベントをやるなり、コレクションのPRをやるというようなね。その発案はやはり特定の推進グループを設置しないといけないですね。

七〇年代だったと思いますが、科学研究費なんかでワーバーク関係の本をまとめて買って、それを使った授業を「ワーバーク派研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」というように何年もつづけてやったんです。そして、その結果を最終的に平凡社から『ヴァーブルクコレクション』という形で出版した。いまは大学の研究の顔として総合文化研究所がありますけれども、当時はそれを大学の研究組織としてではなく、図書館と授業と外部の出版社との連携でやっていったわけね。

山村 昔、アメリカの大学へ調査に行ったら、ある大学ではたとえば「平和研究プログラム」というようなものを学科とは別の形で持っていて、そこでは研究と教育がタイアップしながら共同・協力の研究教育プログラムが運営されていた。学生も含めてね。和光の場合だったら、「ジェンダー・プログラム」でやや似たことがきつつある。ああしたものがないくつか可能性としては考えられるかも

れません。

松村 アカデミズムについてのポリシーを、大学の中で、どこが自発的に決めていくのかということですね。行政とか設備とかそういうのはあるのだけれどもね。……では、まとまりませんでした、このあたりで終わりということにしました。う。長時間、ありがとうございました。

松村一男（まつむら・かずお）
神話学、宗教学

岩間暁子（いわま・あきこ）
社会階層論、家族社会学

堂前雅史（どうまえ・まさし）
動物行動学、生命科学論

松枝到（まつえだ・いたる）
美術史、アジア文化

山村睦夫（やまむら・むつお）
総合文化研究所長、日本経営史、日本経済史

教員アンケート

わたしの

研究と研究法

浅見克彦

表現文化学科

境界を越える思考

思考と探究の方法は、対象との格闘以前にあらかじめ確定しているものではなく、対象との格闘のなかで形をなすものである。これは特定の分野に限ったことではなく、研究が硬直化しないためにつねに意識すべきことである。

たとえば、社会思想の分野では、歴史的背景を押さえながら、ある思想に影響を与えた他の思想との関わりを明らかにするのが慣わしである。しかし、こうしたマニュアル化した手順は、学会での意地悪な質問を避けるには有意義だが、探究の魅力や質を必ずしも保証してはくれない。

思想の分野では、時代を超えた突きあわせのなかで、ある思想家が語らず、軽視したことに注目し、その思想のネガを透かし見ることから魅力的な観点にたどり着くことが少なくない。よく知られた比較思想史の方法である。しかしこの方法は、同時代の諸思想や、時間的に連なった思想に限定され

るところではなく、本を「釣り」にゆくところである。とはいえ、一つの棚で「パラ読み」をしていると、すぐに一時間経ってしまう。いまどきの研究者には、残念ながらこうした時間の使い方がなかなかできない。どうしても、キーワードで網をかけ、引つかかった書物にサーチをかけるという方法をとりたい。だから、書名だけでなく、キーワードでも書籍の検索ができるとありがたい。これができるとできないとは、さまざまな分野やジャンルを越境するジャンプ力がまったく違ってくる。キーワードで、哲学から映画批評にジャンプし、その映画批評の周辺に存在する別の書物に「パラ読み」のサーチをかけることもできるのである。

独語では、探究には *forschen*、学生がする勉強には *studieren* をあてる。もちろん学生が *forschen* することもありうるが、大事なのは両者が次元を異にするものとされている点である。両者を分けるポイントはいくつもあるだろう。だが私が重視するのは、与えられた問いをめぐるいろいろな調べる努力に対して、既存の言説の陰に光をあて、忘却されている問いそのものを浮き彫りにしてゆく営みを、*forschen* として区別するという観点である。だが、こうした質の探究は、越境的な探索ができる情報空間がなければ難しい。研究者は、隠された問いそのものを探索しやすいような情報空間

ることが多い。たとえば、プラトンの愛に関する言説を、ギデンズが論ずる親密性の変容にリンクさせることは、しばしば専門領域の仕切りを軽視した「強引」な飛躍として叱責される。だが私は、こうした思想的切斷の飛び越えに潜む、イノヴェイティヴな魅力を追求したいとつねづね思っている。

その場合、探究の方法は、時間的連なりのない遠く隔たった言説をも射程に入れつつ、ある意味で既定の文脈をすりぬける「乱読」のなかで見えてくることになる。とはいえ、ただやみくもに書物の海を泳ぐのはしんどい。何らかの試行的指標をたて、ほぼ無限ともいえるコーパスに限定を加えなければならぬ。たとえば、タトゥーの文化的意味を探究する場合、試行的指標として身体文化、あるいは身体変造といったキーワードを立ててみる。そして、社会学の身体文化やファッションに関わる議論、哲学の身体論、人類学や宗教学の分析などを探索してゆく。さらには、映画批評のサイボーグ論や、身体アートに関する批評、そして化粧やバイオテクノロジーをめぐる議論なども、アモルフアスな思考の鎖に組み込まれるのである。

こうした方法をとろうとするとき、図書館を渉猟するという行為はなかなか効果的である。つまり、図書館の本の森を渡り歩くのである。そのかぎりでは、図書館は本を借りにゆ

の構築という問題にも、つねに鋭いまなざしを向けなければならぬのである。

飯沼博一

名誉教授

私の研究軌跡

私の研究対象の原点は、経済学説史論理を考察する中で、修士論文「重商主義における貿易差額説」——マンを中心として、スミス・ケインズの若干の考察——をすることであった。大学院紀要第二集「貿易理論上におけるサア・ジェームズ・スチュアートの貿易差額説」を書き、この線上で産業保護主義視点との関連を検討したことに始まる。

以後自由貿易論上のスミス対スチュアート及び歴史学派、とりわけシュムペーター論理の位置づけ、リカード、ミル、マーシャルに続くケインズの論理及びタウシンング、ヘクシャー、オリーン、ハロッド等の対比・継承における国際貿易の意義・必然性の問題、内在的批判を検討し、古典・新古

典派貿易理論からみる伝統的国際貿易理論、現代国際貿易理論を検討した。その上でパックス・ブリタニカからパックス・アメリカナに始まるアメリカの相互主義を基調とした覇権への道をトレースし、その実証のため主に東・東南アジア経済・貿易の歴史と各国・地域の社会構造にメスを入れた。その中で日本経済・貿易・産業の発展過程、とりわけ日本型システム、企業システムの問題点と日本型経営の存続のあり方及び日本企業の東・東南アジアでの国際貿易・投資の位置付けと展望を試みた。

これらの論文の所在と視座は端的に言えば、A・スミス以降の経済学は、その科学性が問われる中で、経済現象を社会・政治的背景から除去し、抽象分析になりがちであったことの若干の解明である。この復元ないし総合化に必要なものは人間性の復活であり、それは純粋に営利的計算に基づくホモ・エコノミックスではなく文化・歴史・風土に根ざす人間であり、営利計算の仕方は人間によって様々であるということである。

よって、そのような複雑な状態を全体として包括的に把握する方法論、複雑経済学―開放性系、非線形性系、組織性が問われるのであるが、この研究は、数理モデルで解析的またはコンピュータでのシミュレーション分析によって解決し

ようとするわけで、目標は壮大であるが、万能ではなからう。その将来は、むしろ古典・新古典派経済学の延長線上にあると考えるのである。

したがって、そのような観点をふまえ、私の大学での主要科目「国際貿易論」「国際経済論」とりわけ「国際経営論」は学問的に専門化の上で異相があるが、その基調は世界経済・政治の現象を見つめることを主眼とし、その上で、現在二百に満たない国民国家とクルドに象徴される六千から七千にわたる国家を持たない民族・種族があることを忘れず、永い人類の歴史は征服国・者の歴史が描かれ、被征服国・地域の歴史が軽視されたことを念頭に置いたのである。

その上で前述の経済学形成のベースは交易（TRADE）であり、イタリア・ジェノヴァ複式簿記が一三四〇年から始まり、完成は一四〇六年から一四九〇年、ヴェネチア式複式簿記が通商関係にあつたヨーロッパ諸国地域に急速に伝わり、商業資本主義が確立される。そのことはイタリアに始まるルネッサンスの時代でもあり、その背景に四〇〇年以前からのスペイン、アンダルス・トレドの数学的概念は、アラビア・アラブ人、イスラム教徒によると言える。一方一四五三年オスマントルコがコンスタンチノープル（イスタンブール）を占領したことが、ビザンチン文化の崩壊と三つのシルクロ

の人種、宗教、地政、言語、歴史、文化、環境、e t c. を客観的に見つめる眼が必要であることは言うまでもない。

伊藤武彦

人間発達学科

問題に応じて自由に方法をえらぶ

私のゼミのテーマは平和心理学の構築である。平和心理学は平和問題について心理学的な観点と知見と方法を用いて研究する科学である。平和心理学には三つの方法があるといえる。それは、①実証的方法、②批判的方法③構成的方法、の三つである。

①実証的方法

実証的方法とは、経験的な証拠に基づいて実証するという方法であり、心理学では観察に基づいている場合が多い。観察には自然的観察と実験的観察そして参加的観察がある。言葉を使った観察法として、調査法がある。調査法は、面接

ドのうち絹の道と海のシルクロードが閉鎖されたことで、キリスト教学者が追われ、各国に分散し、その知識が普及したと言える。その延長線上にポルトガルのヴァスコダガマなどによる南アフリカを迂回するインド航路の再発見などがあり、スペインの、コロンプスによるアメリカ大陸発見とが、現地に対するヨーロッパの苛酷な植民地支配の発端になる。そのようななかで、株式会社設立が一六〇一年イギリスで起こったが、実際には一六〇二年のオランダで設立された東インド会社に求められる。当時アムステルダムには多くの小規模貿易会社の組合があり、その資本を国により合同し、東印度向け貿易会社に独占させた。その後、重商主義時代を経てイギリスを発端とする産業資本主義の到来となる。イギリスではスミス、フランスではケネーの論理となる。十九世紀にはアメリカ市場論などでドイツでの経営経済学が開花をみ、その結果がアメリカ経営学となること、日本の経営学発展の原動力になった平井泰太郎・増地庸次郎・佐々木吉郎など先駆的先生はまず学説史論理を学んだこと、を想起すべきであろう。

私の研究している国際経済・貿易、投資、経営、国際経営論などの場合、理論の発展への期待は勿論であるが、その場合現実の世界政治・経済での国・地域構造、その背景として

(インタビュー) 調査と質問紙(アンケート) 調査に分かれる。調査法にはもう一つ、質問紙調査法がある。これは、あらかじめ用意した調査用紙に沿って回答を求める方法である。実証的方法には、得られた資料(データ)を数量化して分析する場合(量的方法)と、数量化しないで分析する場合(質的方法)とがある。量的方法と質的方法を組み合わせた、PAC分析という方法もある。

従来の伝統的な心理学の方法では、この実証的方法が過度に重視されてきた。しかし、人間の価値や尊厳や生活の質を損なうことにも心理学は貢献してきた。その例が軍事心理学である。心理学では、人間を対象とするため、価値の問題を抜きにできない。政治的中立という立場は、それ自体、ある政治的立場に立っている。また、意図的に、人間の尊厳や価値を損なうことに寄与する応用心理学を批判することが必要である。軍事心理学はこの点で批判される研究が多い。証拠に基づく立論だけでは心理学は十分ではない。価値的な立場で、人間の平和と福祉に有害な心理学研究や、社会現象を批判することもしばしば必要となる。

②批判的方法

批判的方法とは、これまでの通説や研究結果や研究方法を

④まとめ

心理学の研究の寓話として、暗闇で、落とし物を捜すときに、明るい場所のみ探している男の例がある。これでは本当の捜し物は見つからない。心理学では、たくさんの方・技法・尺度があるけれども、自分の知っている方法のみに固執しては真理や最善の解決策には到達できない。問題に即して自由に方法を選択できるようにしたいものである。

岩城正夫

名誉教授

原始の道具を自分で作ってみた

「私の研究法とは…」、今でこそ臆面もなく口に出しますが、じつはその始まりはとても恥ずかしい体験からでした。

隠すこともないので、あからさまに書きますが、私が大学教師になったばかりの三十五年前、私が教科書として採用した著名文献の中の或る機械の挿絵とその解説がどうしても理解できず、学生の前で冷や汗をかいたことがそもその始まり

批判的に検討するやり方をとる研究方法である。そこには、証拠に基づく立論より、価値観に立脚する論理性を重視する。たとえばグールド『人間の測りまちがい』は、(著者は古生物学者であるが) 知能研究と知能検査の応用についてのすぐれた批判的研究である。また、田中昌人『精神薄弱児研究の方法論的検討』は旧来の障害者と健常者との違いを強調する類型的な障害児研究に批判を加え、発達的研究が発達障害児指導方法の改善にとつて有効であることを示す論文であり、批判的研究の良い例である。

③構成的方法(または建設的方法)

構成的方法とは、それまでになかった指導法や実践を生成させる方法である。工学的といっても良い。コミュニティ心理学ではこの方法が重視されている。構成的方法の代表的なものとしてアクションリサーチがある。アクションリサーチは「実践研究」として、日本に紹介された。人間の福祉の改善のための実践に伴った研究活動である。伊藤研究室からはCPNN(「平和の文化・ニューズネットワーク」というウェブサイトを立ち上げ、その発展のプロセスを報告した、高橋と永井の卒業論文などがアクションリサーチの例としてあげられる。

りです。

そんな初歩的なこともわからない自分が情けなく大学教師として失格なのではないかと悩みました。それに続く悶々とした日々は深刻でした。私は大学院も出ておらず学部を卒業したあと転々と職業を変え失業しながら生きてきて、大学教師とは縁のとおいいところにいました。ところが一九六九年の世界中を吹き荒れた大学紛争では科学の根源が問われ全国の大学で科学史ブームが起きました。一時、科学史学会事務局員だった私にさえ口がかかってきました。大学教師の資格もないのにと思いつつ、嬉しさのあまり厚かましくも引き受けてしまいました。そんなわけで自分担当の講義(科学史)には自信など無く、一抹の不安はたちまち現実となり悩む日々が続くことになってしまったわけです。

ところがそれからしばらくして、その挿絵の元になった機械(糸を紡ぐ機械)の写真が某出版社の世界歴史シリーズに掲載されているのを見つけました。その写真をよく見ると先程の問題の挿絵とは構造が少し違うように見えるのです。私がどうしても理解できなかった箇所が違うようなのです。でも写真だけでは断定できませんでした。そこで私は恐る恐るでしたが得意の工作でその機械の模型を自分で作って動かしてみたのです。

その結果、どう考えてみても問題の挿絵の方が間違っているとした判断できなかったのです。そこで思い切ってロンドンまで行って原物で確認しました。やはり挿絵が間違っていたのです。理解できないのも当然です。それによって自分に自信が持てたわけではありませんが、少なくとも劣等意識からはなんとか抜け出すことができたように思います。

そのことがきっかけで教科書に出てくる道具類や簡単な機械は自分自身で作ってみて、それを使用して確かめてみてから講義する。それが私の講義の方法になりました。

ところで、大学教師なるものは講義をするだけではなく、学問研究もしなければなりません。学問研究に慣れない私にとってそれはなかなか面倒なことでした。しかし、ふと思っただのは、自分自身で道具類を作ってみて試してから講義をするという私のやり方は、もしかしたら学問研究にも使えるかもしれないというアイデアでした。

自分自身で実物を作るには、あまり複雑なものはいけません。単純な道具がいいわけです。それには何といっても原始時代です。石器・土器・摩擦による発火具などです。そこで私はさっそく石器作りを試みました。土器の製作もやりました。木による摩擦発火法にはとくに力を注ぎました。でもそれらの体験をまとめるだけで果して学術論文になるだろう

か？あるいは学問研究として認めてもらえるだろうか？などの不安を抱えながら先輩や友人に打ち明けて論文らしくするにはどうするかなど色々教えてもらいました。

そのようにして少しずつ論文のようなものが出来てゆきました。

最初の著書は『原始技術史入門』という本です。たまたまその本の中に書かれていた古代発火法が評判となって、その後『原始時代の火』『火をつくる』などの著書も出しました。また『原始人の技術にいどむ』『原始時代の発明発見物語』という本も出しました。それらの本の特徴は私自身が昔の道具を自分で作って、それを使ってみた体験を語っている点です。実物を作り体験しながら考えるのが私の研究法といえるかもしれません。

岩間剛一

経済学科

たとえ一日に一枚でも
コツコツと書く

わたしの主要な専門領域はご存知の方もいるかもしれませんが、資源エネルギー論です。資源エネルギー論とはどのような学問領域かというと、石油や天然ガスを中心としたエネルギー情勢が世界経済にどのような影響を与え、わたしたちの今後の生活にどう関係してくるのかを研究する奥深い学問です。

最近、新聞や雑誌、テレビ等で盛んに報道されているように、二〇〇六年夏には原油価格が史上最高価格を記録し、イランの核開発問題、イスラエルのレバノン空爆などによって中東情勢は緊張化し、それに伴って原油価格は人類の歴史上最高価格に達しています。しかし、日本の現実を見ると、石油の九九・九%を海外に依存し、国内にほとんどエネルギー資源を持たない資源小国です。実は、米国や英国を初めとした先進諸国は国内に豊富な石油や天然ガスといったエネルギー資源を持ち、国内にほとんどエネルギー資源を持たない先進国は日本くらいのもなのです。そうした極めて脆弱な基盤のもとにわたしたちの生活は成立しているのです。

今大学で学んでいる学生の皆さんは、豊かになった後の日本で生まれ、育っています。夏にエアコンがついた涼しく、快適な部屋で、蛍光灯の照明のもとでテレビやゲームを楽しむ生活が当たり前だと思っています。しかし、そうした豊か

な生活も、本当は日本から遠く離れたサウジアラビアなどの海外から貴重なエネルギーを輸入することによって、かろうじて成り立っているという地球的事実を知ってもらいたいと思って、わたしは毎日研究を続けています。

わたしが今一番関心を持っていることは、原油価格の高騰とともに、イラン、ロシア、ベネズエラなどの産油国、産ガスの将来の豊かな生活をこれからも保証するために、海外の石油・天然ガス資源の確保に一所懸命の努力をしています。しかし、イランのアザデガン油田の開発、ロシアのサハリン開発といった日本の命運をかけた資源開発プロジェクトも、資源を持った国々のナショナリズムの高揚によって、日本の二十一世紀におけるエネルギー安全保障の確保は困難な状況に追い込まれています。

わたしは、そうした最新の国際エネルギー情勢を研究するために、毎日いろいろな雑誌、新聞、専門書に目を通しています。特にエネルギー問題は海外が中心のために海外の最新の文献を読むことも頻繁にあります。皆さんの勉強もそうですが、ある日突然に二百枚のレポートを書くように言われても、それを一日で書くことは不可能です。しかし、毎日十枚ずつコツコツを書くことをたゆまず継続して、二十日で二百

枚のレポートを書くことは可能です。わたしは、どのように時間がなくても、毎日かならず専門領域の資料に目を通し、その日に思いついたことをパソコンで少しずつ書くことを日課としています。今は、パソコンにはワードという優れた文書作成ソフトがあります。たとえ一日に一枚でも二枚でも良いですから、たゆまず勉強し、文章を書いていくことが大切です。それがわたしの研究方法です。

岩本陽児

人間発達学科

ひたすら一次資料を求めて 足で稼ぐ

「つりは足を釣れ」ではありませんが、私は、自分のいる場所のことを研究する土着志向を旨としています。英国研究もその延長。一次資料を訪ねて足で稼ぐのが私の方法論です。一九九〇年代はじめに渡英しましたが、行った先で見えた英国は、世界最初の産業国家という激動の歴史とはうらはらに、みどりに囲まれた穏やかなお国ぶり。昨今の我が国の方がは

るかにすさまじい。聞くと見るとの大違いにいささか無然としつつ、この変化をもたらした産業革命後の環境保全運動に関心を持つようになりました。英国というと、ピーターラビットのナショナル・トラストが有名ですが、一八九五年にこの団体ができる以前に、三十年におよぶ蓄積があったことを知るに及び、以来NPOのネットワークイングによる環境セクターの生成・発展の過程をひもとく作業に従事しています。英国に暮らしていた時分には、論文を三本書くうちの一本は英文でと心がけてきましたが、和光に着任してからは、もっぱら日本語。せめてものことに、サマリーだけは英文にしている。うさを晴らしています。

さて、この十年で、わたしたちはIT化による研究環境の激変を経験しました。しかし、私が探すような古い逐次刊行物などは、電子化の優先順位が高くはないようで、念のためカード索引を当たります。この両者の中間を行くというのか、ロンドン大学の、端末に表示されたカードをキーボード操作でめくっていくソフトは珍品でした。それにしても、ザ・タイムズ紙の記事がインターネットで検索できるようになったのは、驚天動地と言ってもいいくらいの衝撃。以前は、年ごとに四冊の索引を机に積み上げ、見出し語をチェックしてはマイクロフィルムをかけるという作業をしていたものが、今

や一瞬で記事そのものが検索・印刷できます。

かように情報検索が簡単になったのに、研究の水準は前インターネット時代と比較してみても果たして向上していると言えるのかどうか、忸怩たるものがなきしにも非ず。とはいえ、インターネットの検索は、キーワードが適切でないとくず情報ばかり拾いますから、意外に難しいと思っています。

私のいたレディング大学は二十世紀に入ってから出来たところなので、それ以前の図書はあまり入っていません。そこで、日帰りの図書館行脚が続きました。お世話になったのはロンドンシティ図書館、ロンドン大学セネットハウス図書館、同大学LSE政治経済科学研究所図書館、大英図書館、ボードリアン旧館、新館その他オックスフォード大学の図書館、王認全英建築家協会図書館、リンネ協会、イーリング図書館などです。

閉架のところや開架の所。いろいろありました。閉架書架というところ、大英などは辛抱強く待たされましたが、セネットハウスの図書館は、書庫が別の所にあつて、当日の閲覧は無理。しかし、三日前までに予約を入れておくと、カウンターに行けばすぐに出てきて、さほど不便を感じませんでした。

LSEの図書館は開架式。チャンセリー・レーンの古い建物は鉄の唐草模様が美しい会堂建築で、風格のあるもので

した。思い出深いのがその地下の書庫。迷路のような部屋が連なっていて、閉所恐怖症の人には使いづらかったでしょう。私がしばらく通わなかった間に「大学生立ち入るべからず」のバブがある、リンカーンズ・インの南の大学街に移転して螺旋のラインが美しい吹き抜けの、超現代的なビルになってしまいました。そばの建物には、第二次大戦時の空襲被害を記録した銘文があります。

オックスフォード大学の中央図書館であるボードリアンの、旧館の方には、鎖でつないだ写本が昔のままに置かれた、天井絵の美しい一画があり、夜になると薄暗いところを、昔の学生のオバケでも出ていないかと、わざわざ息抜きに散歩したりしたものです。院生の利用が多い静かなところで、司書の水準は抜群。隣接する円形講堂から、夕闇に紛れてコンサート音楽がすかすかに流れてくる様子などは風情のあるものでした。その反対の市場側にあるラドクリフ・カメラは、重厚な石造りの外見とは裏腹にコンピュータの端末が多く並んでいて、意外な取り合わせ。理科系の学部生の利用が多いところで、活気がありました。

手を抜いて、足で稼ぐがなかったこともあります。

明治初年に岩倉具視の米欧使節団が英国に滞在したときの現地側記録の渉猟がそれで、彼らの滞在先を岩波文庫の『特

命全權大使米欧回覽実記』から推定し、日付を旧暦から新暦に改めた上で、全英各地の図書館の地域史部門に文書を送って照会したところ、完璧といつていい資料群を手にする事ができました。そこで、ロンドンの邦字新聞に一年間に渡り記事を連載し、さらに、私は岩倉具視の研究者ではありませんが、とりあえず彼らの博物館との出会いに絞って論文を書いたのですが、明治初年の博物館史の空白を埋めたということとで、全日本博物館学会から賞をいただくことができました。

ことの発端は、レディングの地域史の本を読んでいて、ヴィクトリア時代に日本使節が来たとの記事に接し、さつそく町の中央図書館で新聞のマイクロフィルムを調べて同時代の記事を探し当てたこと。図書館の使い方に習熟しておいて良かったと思ったことです。

上野俊哉

表現文化学科

三十冊の本を並行して読む

（者）の前身集団の雑誌名が「ポトラッチ」（北米先住民の贈与慣習）であつたことを知って、身勝手に、そして気ままに書物にあたっているだけでも、いつのまにか研究のすじはできてくるものだな、と思っていた。

山のなかでテクノをかけて踊る、などという昔のワングルマガイの文化に入れ込んでからは、DIY（自分たちの手で作る）や地域通貨というかたちで、このギフト・エコノミー（贈与の経済）にまたまた出会いなおしている。

こんなやり方で来たので、自分の専門領域の本しか読まない研究者をあまり信用していない。講義を聞く学生にとつても、偶然の寄り道や迂回路をもっていない教師や、自己の方法に対する懐疑や照れ（なんちゃって）のない研究者の話が魅力的に聞こえるはずがない。

ただただ自分は本のジャンキーであり、洋書、和書の専門書、小説、マンガなどつねに三十冊以上は同時に並行して読んでいる。研究室も自宅も本の山に埋もれている。整理整頓はしないが、学生などに質問されたさい、ほぼ正確に目的の本を瞬時に掘り当てて手渡すことはできる。DJならぬ、TJ（テキスト・ジョッキー）と名乗るゆえんでもある。

最も落ちていて、集中して本が読めるのは、飛行機のなかである。ヨーロッパ便なら、ちょうど英語の本をまる一冊、

はた目からすると、とにかくいろいろな領域に手を出して、研究者とは呼びがたい、とんだ評論家もどきに見えているのかもしれない。しかし、研究のテーマはこの二十年間ほど大して変わつてはおらず、これでも案外、昔気質なところがある。人が人にものを贈る、ということに興味がある。ものを贈られると、何だか負い目や恩義を感じて、そこには義務や約束みたいなものが生まれてしまう。人間の社会やコミュニケーションの根元には、そんな「贈与」というふるまいと、そこから生じる権力関係が隠れている。この大学に提出した三百枚の卒業論文から、よその大学で書いた修士論文、そして四冊目の単著にあたつた『人工自然論』（勁草書房）までは、ずっとルソーをあつかつていた。

よその大学院では、ドイツの哲学者（ハイデッガー）が、何かが在ることを「それが与える *Es gibt*」と表現していることを知る。ああここにも、と思つて図書館を探してみると、デリダもブランショもバリの知識人はみなそのらのことを書いていて、一生ものの主題に出会つていると実感した。

批評家として映画、音楽、マンガ、アニメ、自動車……と、様々な領域について書いていたときも、今もこの主題からは離れていない。音楽のパンク・ムーヴメントにも影響を与えたフランスの前衛文化運動シチュアシオニスト（状況主義

日本語の文庫本を一冊くらはかるく読むことができる。空いたエコノミーならDEFG席を占拠して寝転がつて読むのがいい。

よほど手に入りにくい資料を探すのではないが、図書館をあまり使う方ではない。本を読むとき線を引くので、必要な本はほとんど買つてしまう。だがたまに図書館の開架を歩いていると、まだこんなに読んでない本があるのか、と思うし、ただでさえ濫読過多である症状がますます悪化する気がして、恐ろしくなってしまう。

資料を分類、整理しているよりも、資料になる手前の出来事そのもののシーンに身を投げ入れて動き回ることが好きなのもある。ジャンキーなので、どんな街路でも本を手放したことはない。本を読みながら、街をうろついているうちに、さらに読むべき本、あたるべき資料、会うべき人間が見えてくる。根本的に分類というのに弱く、きちんと秩序正しい整理を見ると逆にイライラしてくるせいもある。困った癖である。

最近、きだみのる（山田吉彦）という社会学者／作家のことを研究している。『ファールブル昆虫記』の訳者の一人にもなり、おそらくはコレージュ・ド・フランスで岡本太郎と机を並べてモースの「贈与論」の講義を聞いていて、坂口安吾にアテネ・フランセでギリシア語の初歩を教えていた男で

ある。

『気違い部落周遊紀行』にはじまるシリーズでは、日本の社会、農村、世間そのものを「気違い部落」として物語／民族誌ふうを描いている。無類の運転好きでブルーバードSSSに「ドブネズミ号」と名前をつけて日本中を走り回っていたとか、戦前はモロッコに旅し、戦後は捕鯨船に乗り込んで南氷洋行つてルポを書いたりもしていて、その無軌道な行動力と、しなやかな思索／表現に強く惹かれる。しかも、ものを片づけられない人間だったらしい。

八王子あたりに散在するきだの資料を集めて、梅根記念図書館でアーカイヴにするぐらいのことはしないといけないかもしれない。ついに、図書館にこもるときが来たのか？

上野正男

経営メディア学科

古典から新しい宝を発掘する

わたしの場合、学部時代の演習や大学院修士前・後期の課程

論について考察したことがある。そのときには、シュメール法を継承して、第六世のハンムラビ王が「ハンムラビ法典」を制定したことに若干触れたことがあった。この法典は第一条から第二八二条からなっていて、その内容は刑法のみならず、商業や会計などきわめて多岐にわたるものとみられる。

ところで、中世四学といわれる学問は神学、哲学、法学そして医学であるが、リベラルアーツは中世期からの主要教養学科とか「自由」・「教養七学科」（文法・論理・修辞の三学科、そして算術、幾何、音楽、天文学の四学科）といわれた（『新英和大辞典』第六版・研究社）。現今の大学の教養課程では「人文科学」、「自然科学」ならびに「社会科学」（とりわけ法律学、社会学、経済学、政治学、歴史学など）となっている。

とくに経済学の分野では「経済学の父」といわれるアダム・スミスの『国富論』（An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 一七七六年）が経済学の学問のはじまりであり、会計学の領域ではルカ・パチオリの『ソムマ・アリティメチカ』（Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita, 一四九四年）が会計学の学問研究のはじまりといわれる。しかし、近代経済学の成立はいわゆる「限界革命」（一八七〇年）であり、また、アメリカの近代経営管理

とも、会計学の専攻であった。本学草創期のカリキュラムをみると、担当科目は、①「プロゼミⅠ・Ⅱ」、②「英原書Ⅰ・Ⅱ」、③「会计学」、④「経営分析」ならびに⑤「演習Ⅰ・Ⅱ」であった。このため、当時の研究分野は「会计学（財務会計論）」や「経営分析」を中心とした専ら原典研究を行っていた。

本学経済学部経済学科には、平成元（一九八九）年四月より、かねてから念願の「経営学科」が新設された。その後、平成十六（二〇〇四）年四月より従来の学部・学科が改称され、本学部は経済経営学部「経済学科」と「経営メディア学科」とに組織変更された。これを機にわたしの担当科目は①「会计学原理」、②「管理会計論」、③「会計史」、④「国際会計論」、⑤「経営分析論」ならびに⑥「演習Ⅰ・Ⅱ」となった。ただし、これら②、③、④、⑤は隔年毎の担当である。

現在、最も関心をもっている研究は、古代社会の会計史についてである。わたしは三十年ほど前に「古代社会における会計思想について」（『和光経済』第十巻第一号・和光大学社会経済研究所）と題して、バビロニア、アッシリア、エジプト、中国、ギリシャ、ローマなど、古代社会における「租税徴収のための会計」、「物的保全の会計」、「会計担当者の誠実性や信頼性を検査するための会計」等、古代社会の会計職能

の基礎はF.W.テイラーの「出来高給制度」（一八九五年）・『工場原理』（一九〇三年）そして『科学的管理の諸原理』（一九一一年）といわれる（『経営学大辞典』神戸大学経営学研究室編・代表占部・海道、中央経済社）。さらにまた、アメリカ会計学の形成はC.E.スプレークの『会計の代数学』（一八八〇年代）や『会計の哲理』（一九〇七年）およびH.R.ハットフィールドの『近代会計学』（一九〇九年）である。いずれも十九世紀末～二十世紀初頭に学問的形成がなされている。いまの経済学・経営学・会計学などの研究の中心はそれら以降である。

古代社会の経済思想にはA.スミスの「分業論」はすでにプラトンが唱えているし、アリストテレスは農業を高く評価している。クセノホン（Xenophon）も農業は富の基礎であるとし、貿易論、銀鉱山の公営化論などを唱導（George Soul, Ideas of the Great Economists, 一九五二, A Mentor Book, p.10）。言語はむづかしいが、古典を繙くと現代の学問的な宝が発掘できるかもしれない。目下のわたしの研究法は多数の書を参考にして、ハンムラビ法典の会計思考を読解してみたい。

梅原利夫

人間発達学科

小さなノートをかばんに入れて

①臨床的な研究法

私はこの十年ほどの間、意識的に取り入れている研究方法がある。それは「臨床的カリキュラム研究法」とでも名づけられるやり方である。私のカリキュラム研究は、学習と指導の場である「教室」という独特の空間に身を置くところから始まる。それも、子どもがランドセルやかばんを背負って入ってくる、朝の登校時からが一番いい。可能ならば、職員の朝会にも参加させていただく。教室や職員室の雰囲気、その学校の教育や指導の質（人間関係の機微）が反映しているからである。「教室の雰囲気」は、実に見事なまでに日ごろの人と人との関係からかもし出されてくるものだ。自分の全感覚とメモ記録を駆使したリアルな対象把握と的確な課題の引き取りが、考察や研究の基礎に横たわっている。

いる。また日常的には小さなノートをかばんに入れて、気がついた時（散歩の途中や電車の中が多いが）に好き勝手にメモをして、まとまったら「思索ノート」に貼り付けている。つまり、日常的にいくつかのテーマを並行して持っていて、考えがまとまりかけた時にフツと頭に浮上してきたことからメモ化（対象化）しておくのだ。このカオス（混沌）の場面での思索活動はきわめて重要であると思う。もうこれが習慣化されているので、小ノートとペンがあれば、思考は自由自在に世界を駆け巡っている。すぐに「自分の世界」に入り込めるので便利だ。学生の卒業論文指導の際にも、絶えず「私の卒論ノート」を携えて思索を継続的におこなうことを勧めている。元来ノートとは、私だけの個性的な表現作品であると思う。

④私の人生を歩いて行きたい

最近のノートには、「いまの自分」の位置を確かめて、私の歩いてきた道・これから進んで行きたい道について、あれこれ考え書き付けていることが多い。決して否定的な意味で言うのではないが、五十歳代後半になってから、私は自分の人生を「心身ともに元気に活動できるあと何年かの生命」というように、「引き算の人生観」で考える時が多い。その点

②本（テキスト）は十回以上読むこと

「本は十回以上読んでくこと」と私が言うのと、ゼミの学生さんたちは「また大言壮語を」と少し冷やかな反応を示す。しかし、私は本気なのである。だいたい一回眺めたくらいで中身がわかるのなら、それは「テキスト」とは言わない。本は、筆者と読者が真剣勝負で格闘するものである。そもそも筆者は何度も書き直し推敲してやっと完成文にしているのだから（そして校正にあたっても文章を何度も読み直しているのだから）、読み手は一回ですべてが理解できるわけがない。価値ある本とは、「ウンウンうなりながら（著者との対話、格闘、コミュニケーションをしながら）読み進めるものである。共感、納得、意味調べ、疑問、反論など、様々な局面をもたせてくれるのが「テキスト」なのである。

使用されている概念を調べるには、「辞書」では全く不十分であり、必ず「事典」を引くように、強調する。例えば、「教育」についてみれば「教養育てること（辞書）」などの理解では全く不足であり、「事典」で何万字もの展開を必要とする内容なのである。

③「思索ノート」の持ち歩き

私はここ十五年ほど、自身の「思索ノート」を書き続けて

で若い学生の皆さんには、多くが「未知数に充ちた足し算の人生観」での発想（それもまた苦悩が伴うが）をするであろうから、「私たちよりも、もつともつと可能性をもった人生なのだよ」と、精一杯のエールを送ってあげたい。

加藤 巖

経済学科

スケッチブックの効用

私の研究テーマは何だろう。あらためて問い直してみると、上手く説明する自信がない。どうしてもといわれれば、「私たちの社会に存在する豊かさと貧しさについて色々な場面を考える」と答えるしかない。「これではわからない」という読者の声が聞こえてきそう。どうも、この状態は研究者の端くれとして長年過ごしてきた身としても情けない。

もちろん、私にもマジメな時期があった。その頃は「貧困国の人々を救うのは私の学ぶ開発経済学だ」などと口走っていた。でも、その後、世界中あちこちに出掛けるようになる

と、どうやら「国によって、地域によって、人によって、豊かさの感覚が違うのだ」と気付かされた。そして、自分があまりにも単純な視点でしか物事を見てこなかった、つまり、自らの「バカの壁」の高さに気が付きショックを受けた。もう少しこの点に触れておくと、私は長い間、一人あたり所得の向上こそが豊かさの象徴であり、経済成長を促す施策を金科玉条の如くに扱ってきた。ところが、世界のあちこちにはそんなことにはお構いなく、貧しくとも豊かに暮らしている人達が大勢いるのだ。また、「経済政策が幸福をもたらすとは限らない」と体験を通じて教えられたことも大きかった。

さて、研究テーマを上手く説明することができないのだから、研究方法も確立したものがあるとは思えないだろうが、エッセイの依頼を受けて身の回りを振り返ってみると、ごく自然に、ある方法を取り入れていることに気が付いた。

それは「スケッチブック」の利用だ。過去六〇七年の間、私の傍らには常にスケッチブックがあつた。つまり、私の旅のお供はB5版のスケッチブックだ。それは小さくて持ち運びも楽チン。その上、硬質の紙には鉛筆で書くことはもちろん、絵具や油性ペンで絵も描ける。旅（＝フィールドワーク）の中で採取したものを取り込むのに最適だ。こうした獲物を取り込むという意味で、私のスケッチブックは少年時代

も書き留めておく。新聞や雑誌の記事なども自在に貼り込んでおく。こうすると、旅の前後でもスケッチブックの情報量は増していく。

こうして丸々と膨らんだスケッチブックを起点として、図書館で資料を集めていけば、活き活きとした報告書や論文が出来上がっていく。さらに、次回の旅には昔のスケッチブックをコピーして持ち歩けば、情報収集の精度も上がっていく。

私はこれからもスケッチブックを持つて「歩く」「見る」「聞く」「記録する」をモットーに人々の生活の場へ入っていく。そして、もつともつとスケッチブックの数を増やして、豊かであることの意味を考え続けていきたい。

岸田 秀

名誉教授

研究計画は「強迫観念」に聞いてくれ

わたしには研究方法はない。かくかくの研究目的を立てて、しかじかの方法で研究したことはない。すでにあちこちで述

の虫取りで使った「虫かご」のようなものかもしれない。

具体的なスケッチブックの使い方は、次のとおりだ。まず、スケッチブックを見開きにして、左側は日記風にその日の出来事を書く。右側には収獲物を貼り付けるか、書き写しておく。他の紙に書いたメモがあれば、見やすいように貼っておく。また、もらった名刺も貼る。あわせて、宿泊先、交通手段、飲食店の領収書やカードなども貼っておく。すると後日、役立つことが多い。もちろん、何を書き、何を貼るかはその時々によって様々だ。ただ一つ大事な点は、あまり大袈裟に構えないことだ。気になるものがあれば、その場で簡単な絵を描けば良い。私は昔ボルネオ島のジャングルで初めて見る果物？を食した際にも絵を描いておいた。今でもその下手な絵を眺めると、不思議に味や香りまで蘇ってくる。手書きの地図も有効だ。数年前に訪れた町の概略図でも、眺めているとその場の土地勘が戻ってくる。

また、スケッチブックは現地の人から情報を得る際にも有効だ。例えば、言葉が通じない場合も、スケッチブックを開けば、色々なことを描いてもらえる。難しい単語の綴りも書いてもらえる。こうした現地の人からの情報は役立つことが多い。

そして、旅の最中はもちろん、その前後に人から聞いた話

べたことがあるが、わたしは、中学生のとき、強迫神経症に罹って、それから何十年か経った今もなお、治ったような治らないような状態である。何はともあれ、中学生のときから今に至るまで、ある日突然、どういうわけか、何かの観念やイメージが飛び込んできて、いつまでも頭にこびりついて消えないという神経症的傾向が依然として健在であつて、わたしの人生は、そのように頭にこびりついて離れない強迫観念にしょっちゅう追いまくられて悪あがきしてきた人生であつた。いずれにせよ、そうした強迫観念にこだわら、何とかしようとかあれこれ考えるのであるが、考えているだけでは空回りするので、考えたことを書き留めたりしていた。書き留めてどうにかしようというつもりはなかったが、もうだいたい歳を喰ったあるとき、ある雑誌の編集長が何か書いてみないかと言うので、折に触れてとりとめもなく書き留めていたことをいささかまとめて文章にし雑誌に発表したところ、意外なことに面白いと言われ、図に乗って同じようなことを書き続け、書いた文章を集めて本にすると、これまた意外なことによく売れて、確信があるわけではなかったが、同じようなことをやっていけばいいらしいと何となく得心し、現在まで、強迫観念に振り回されながら、同じようなことを続けている次第である。

中学生のときという敗戦直後であるが、わたしにしづく取り憑いた最初の強迫観念は写真で見た日本兵の死体であった。大東亜戦争で日本兵は二百何十万人か死んだのとどこであるが、その後もずうっと夥しい日本兵の死体のイメージが休みなく頭の中を駆け巡って息苦しかったので、わたしは、なぜ彼らは死んだのか、なぜ日本は負ける戦争を始めたのかなどと考え始め、考えたことを文章にしたのが「日本近代を精神分析する」であった。それと同時に、なぜアメリカ人はあれほど大量に大々的に日本人を殺したかったのかということも気になって書いたのが「アメリカを精神分析する」であった。要するに、わたしは、何かが気になると、それが強迫観念になり、何とかそれを納得がゆくように説明できる理屈を考え出さないと心が乱れ、不安で落ち着けないので、しょっちゅうネチネチ、ウジウジ、クヨクヨ、コセコセと考え、それが癖になってしまい、そして、考えたことをネタにして文章を書くのであった。そういうわけで、例えば、人の足を引っ張って引きずり下ろすのが好きな人が周りにいたので、なぜそんなことをするのかと気になったことがキツカケで書いたのが『嫉妬の時代』、文部官僚や厚生官僚などが、普通なら恥ずかしくて、または気が咎めてとてもできないようなことを平気でするのはなぜかということが不思議で、何

吉川 信

文学科

面白くなければやめちまえ

「研究者」と呼ばれる身分ではあってもひとさまにご紹介できるような「研究法」は持ち合わせていない、いや「研究法」なんていう意識を持ち合わせていない、ただどおよそ「文学研究者」なんてそういうものなんじゃないか、そうに違いない、いやそうに決まってる——と勝手な推測をするのは、ひよっとすると自分がダメダメな研究者だからなんじゃないだろうか、そうかもしれない、いやそうに違いない……ひとことで言うと「古い」のだろうか……いや、たとえば大昔の「大英文学者」だったら、自宅の書斎の机でも、英国紳士風に背広とネクタイを身につけないとシェイクスピアの頁を捲らない、とかいうひともいただろうし、何を読むのにもカードを取りながら、カードにコメントを書き加えながら資料を増やしていったはずだし、そんな読み方は今だってけっして古い方法とは思えない。基本だ。気になる統語法の収集や歴

とかその理由を知りたいと考えて書いたのが『官僚病の起源』、周りの男女学生の性に関する考え方や行動が、わたしが学生だった頃とあまりにも違うことが気になり始め、なぜなのかと考えて書いたのが『性的唯幻論序説』であった。

現在、日本の中学や高校で使っている教科書の世界史は、考えれば考えるほど怪しい点が目につき、これはヨーロッパ製の世界史で、ヨーロッパ人に都合がいいように歪められていて、嘘だらけなのではないかと疑い始めている。今、その疑念が強迫観念となつて取り憑き、わたしをこづき回している。しばらくは逃れようがない。

このように、わたしは気紛れな強迫観念にいつもこづき回されて右往左往しているのであるから、「今後の研究計画」などを聞かれても困るのである。暴れ馬に乗っている人が「どこへ行くのか」と聞かれて「俺は知らん。馬に聞いてくれ」と答えたという話があるが、わたしも「今後の研究計画」は「強迫観念に聞いてくれ」と答えるしかない。

史的な調査は、なにもフィロロジストだけの方法ではないはずだ。あるいは批評書・研究書からの引用を蓄積して行く手間だつて惜しんじやいけない。なんでもPCに打ち込んでしまふ現代だつて、同じことが繰り返されているに違いないし、自分だつてやつてる。でもそれが、「研究」という名で呼ばれることに少なからぬ躊躇い、戸惑い、忸怩たる思いがつきまとうのは、ようするに「文学」という呼称——とりわけ「英文学」というそれ——が、昔ほど関心を集めるものではなくなつてしまった、という事情があるせいかもしれない。まあともかく、これまで一番関心を持つて読んできたのはジェイムズ・ジョイスというアイルランドの作家だつたし、この作家に興味を寄せる作家・批評家がわんざといた（今でもいる）せいで、「ジョイス産業」に便乗（加担？）しながら批評も書いてきた。なぜこれに関心を持つようになったのか？：あれは確か大学三年のとき、ひとつの短篇を読んだのがきっかけだつたと思う。翻訳では『ダブリン市民』、『ダブリンの人々』、『ダブリンの市民』など現在でも複数出ている。そのなかの一篇「痛ましい事件」というのを英文講読の授業で精読した。自己を物語化する習癖のある男が、人妻に心を寄せられ、これを拒絶し、やがて死んでしまう彼女を、結局は理解できていなかったことを最後に悟る物語である。この

ストイックな独身男にはたぶん、アンナ・カレーニナもマダム・ボヴァリーも理解できなかったことだろう。そんな自己完結した男の、絶望に終る物語だった。二十歳そこそこの自分には十分刺激的な「メタ・フィクション」だった。その後この作家に興味を持ち、やがては『ユリシイズ』、『フィネガンズ・ウェイク』という大作があることを知る。アイルランドという植民地の歴史・文化に興味を抱いたのはその後の話で、ニュー・ヒストリシズムが言われ出す大学院時代だったと思う。出会ってしまった『ユリシイズ』は、幸か不幸か構造主義以降のあらゆる批評理論の実践場だった。

日本の「英文学」というディシプリンが、国策として開始された「英学」の伝統上にあることはだれだって知っている。植民地主義を引き摺るこのディシプリンにどこまでも浸つていようという気はさらさらないし、それが安全だとも思わない。けれども、『English』（英語でいう「英文学」）というディシプリンから独立して誕生した「アイルランド文学」を語ろうとすれば——そう、こちらはそれが面白いから読んでいるに過ぎないし、面白いから論じたいと思うに過ぎない。面白くなければやめちまえ、と言いたい——対象にはイギリス帝国文学を外すわけにいかない。興味はそこから世界中の文学作品へと限りなく広がって行く。そうしていろいろと経巡っ

私の研究は、経済学の分野に属し、資源環境問題ないし食料・農業問題を対象として、事実関係を明確にしたり、独自の論理によつて一定の知見を示したりすることを目的としている。かつ、基本的には個人研究である。

相対的な話ではあるが、経済学は、人文・社会系では最も客観性を求める分野である。独りよがりになつてはいけない。審査の厳しい有名ジャーナルに何本の論文を掲載したかで、学者のステータス（と就職先や昇進）が決まるアメリカ流の論文主義もどうかとは思ふが、気合いを込めた研究は、できるだけ第三者の批判を仰ぐようにしている。研究者仲間との交流だけでなく、成果を学会などで報告し、審査のある雑誌にも、たまには投稿するようにしている。

本学でお世話になる以前の十八年間、私は国の研究所にいたので、研究課題は、ある程度与えられていた。論文を書く訓練も受けた。現在、研究課題の設定は自由である。しかし、意味のある課題を設定する（私より年配の学者はこれを問題意識と呼ぶ）のは、実は非常に難しい。きっかけが必要である。研究グループに参加させてもらったり、行政機関などからの依頼による課題をこなしたりする中で、新たに自らの課題が生まれてくることがほとんどである。科研費などの助成研究に応募することは、単に予算の確保だけでなく、過去の

ているうちに、やがては一英文学者も、あまり美しくもない「日本のわたし」に戻つて来ざるを得ないんじゃないだろうか——とまあ、そんなふうなことを考えたりもする。

ともあれ、今は自分に書けるものを書いて行くしかない（学生の借りない英文の本も図書館には入れてもらいうしかない）。日本で「英文学」のエッセイを書く人間がこれ以上増えることを、いったい誰が望んでいるのか、という問いはたぶん、これ以上小説家が増えることを誰が望んでいるのか、というディヴィッド・ロτζジの白虐的な問い（『考える…』白水社）に似ている。しかし、まずはしばらくの間、ポスト植民地の現代アイルランド小説について論じて行きたい——つてゆーかー、そんな共著の原稿、とつくに締め切り過ぎてるのに夏休みが終わる…。

小林弘明

経済学科

「知る」だけでは
「研究」にならない

研究成果にもとづく研究課題自体が客観的な評価を受けることになるので、とにかくエントリーしている。

客観性の担保は、ある意味、最低限の条件である。そもそもの課題設定と研究による分析内容には、独自性（オリジナリティ）が何よりも求められる。いずれにしても、過去の研究や官庁・国際機関などの情報を、できるだけ広範に、かつ隙間なくフォローしなくてはならない。現在のインターネットは心強いが、やはり大学図書館が必須である。

下記の研究課題が示すように、私の研究は、冒頭述べたような意味で、事実にくしくした実証的分析を主体としているので、現地調査・関係者ヒアリングも必須である。また、分析対象に関連する既存の統計は、できるだけ原典に遡って入手し、自らのデータベース（今はエクセル、以前はロータス、スーパールク、さらに自作プログラム）として、独自の作図・作表・統計分析ができるようにしている。十年ほど前までは、紙媒体の情報をパソコンに打ち込むために研究時間の多くを要し、さらに二十年以上前には、大型計算機を順番待ちで利用したものである。この統計分析やその他の数値計算（計量経済分析）が論文の主役となることも多い。

「見たい」「知りたい」が、研究の原動力である。しかし、単に「知る」と研究とは違う。節目には、研究成果を公に

することが、どうしても必要だと思う。この点は、人文・社会系の分野では曖昧になりがちだと思う。私は、自信家ではないつもりだが、何らかの研究成果まで到達していない分野の知識には、一段と自信が持てない。教育面に投影して、「知っている」ことを話すのと、「研究した」ことを話すのでは、自分にとって、かなりの違いを感じる。

最近の研究課題・著書

テキスト『環境資源経済学入門』（共著、泉文堂、来春出版予定）／科学研究費助成研究「政策評価マトリクス（PEM）分析によるFTAの影響評価に関する計量経済学的研究」（研究代表、平成十六〜十八年度）／同「コメ市場の自由化に向けた生産対応と政策設計のための計量経済学的研究」（研究分担、平成十八〜二十年度）／同（出版助成）『WTO、FTAと日本農業―政策評価分析による接近―』（青山社、二〇〇五年）／「EUにおけるバイオマスエネルギー政策の展開」／『東アジアの経済発展と環境』（岡本喜裕と共編著、日本経済評論社、二〇〇五年）など。

ゆる理系の研究を進めていた。修士課程修了後、NHKに入局し放送の現場を経て、放送技術研究所で固体撮像素子の研究に従事していた。その後、証券系シンクタンクに転職し、証券アナリストといういわゆる経済や経営に関わる仕事に大きく転換した。当時は証券アナリストという仕事が日本でようやくその存在が目ざされ始めた頃で、わたしの所属していた部署でもほとんどが理系出身の転職経験者であった。つまり、経済、経営の分析の仕事も、理系の仕事と共通点があった。それは、データの分析が重要であるということである。もちろん、実験で得られるデータの分析から、経済統計や有価証券報告書、企業への取材などから得られるデータの分析へ替わるわけであるが、仕事の基本はそうは変わらなかった。それから、大学院の博士課程へ進学したが、ここでは工学系の研究所の中にある経済系の研究室に所属し、学際的な研究をさせていただいた。その後、和光大学経済経営学部へ置いていただくことになった。したがって、主に経済、経営系の研究を担うようになって十六年位経つが、研究を進める上での方針は一貫するよう心がけている。それは、研究対象をより客観的に把握し、可能な限り数量的なモデルによる分析を通して、結論を導くというスタイルである。とても「研究法」と胸を張れるものではないが。

小林 稔

経営メディア学科

研究法を考えるのが 研究のはじまり

「わたしの研究法」という題目であるが、自分の「研究法」といえるほど明確なものがあるわけではない。研究者として仕事をしていく中で、特に社会科学を研究対象としている場合、その時代背景、社会、経済の状況などにより、研究の手法はおのずと異なってくるのが普通だろう。というよりは、研究とは、研究対象に対して、どのようにアプローチしていくのか、つまりどのような研究法が最適であるか、その研究法を考究することこそが、主な仕事であろう。研究法が明確になれば、後はその研究法を実現し、新たな知見を見出していけばいい。例えば、理系の研究であれば、研究法が固まれば、実験やコンピュータ・シミュレーションにより、データを取得し、得られたデータの考察を通して、結論を導き出すことになる。

わたしは、大学院修士課程では、電子工学を専攻し、いわ

社会科学では理系と異なり基本的に実験はできない。したがって、分析の元になるデータの取得が極めて困難であり、厳しい制限もある。限られたデータによる分析では、導き出される結論にも限界があるし、その正当性にも疑問が残るケースもある。ただ、数量的なモデルの構築によって、研究対象にたいする議論のベクトルが定まり、問題解決のヒントにつながることもある。つまり、研究対象となる問題の構造をより理解しやすいものにするとともに、その問題解決のためには、どのような要素がどの程度のインパクトを与えるのかを具体的に比較検討することも可能になる。ただし一方で、数量的なモデルによる結果を慎重に評価する姿勢も必要である。分析の結果を謙虚に受け止め、モデルによる分析結果とは別に、社会、経済の動向や関連資料のレビューを踏まえ、総合的な考察を通して研究対象に対する結論を導くことが重要であろう。その意味では、数量的なモデル分析は、研究結果の妥当性を判断する際の一つのスパイスの働きといえるのかもしれない。このように、社会科学における数量的モデルの分析には限界があることを十分承知した上で、あえて、数量的モデルの分析にこだわるのが、研究を進める上でのわたしの一つの方針といえるだろう。

櫻井清

名誉教授

図書館とわたし

①『図書新聞』と『週刊読書人』

大学の図書館ならどこでも、レファレンスブック・コーナーに『図書新聞』と『週刊読書人』が揃っていて閲覧できる。いずれも戦後間もなく創刊されており、出版物の紹介、研究者・評論家・作家による書評、選定図書週報（日本図書館協会）およびジャンル毎の特集企画など図書関連の情報が満載である。

わが国では毎日、出版物は数百点（二〇〇四年、出版点数七七〇三一点：一日当たり二二一点）にも及んでいるから、これらに目を通すことは無謀である。両紙の記事を通じて最近の出版物、研究の動向がくみ取れるから、読者にとって多数の出版物のなから手に取るきっかけが得られる。特に、「選定図書週報」の欄では、選定されたそれぞれの図書に解説が付されており、目を離せない。皆さんにも一読をお奨め

余談になるが、一九六〇年代に、この分類中、社会科学の経済学（331）の細目記号の修正を提言し、分類委員会がこれを認めてくれた時は嬉しかった。また、上記の両紙に書評を掲載する機会を得た。日本図書館協会では約十年間、図書選定委員を務めたのも、わたしの読書欲を高めるのに役立った。

②インターネットを通じた件名検索の限界

ここ数年、パソコンからのインターネット利用者が急増し、国内では今や約七千万人、千人当たり五百十人がインターネットを利用している。この利用者数と検索頻度は今後一層加速することは確実である。インターネットの件名検索の操作は年々簡単になり、漢字変換の豊富さも手伝って、短時間で狙った事項が画面に映し出されることになった。また情報開陳の裾野も広がり、例えば研究者の経歴や研究業績などは、当該人物を検索・開けば歴然と記されている。自動車産業を検索すれば、数頁にわたって関連事項が満載されており、業界の現況を知ることができる。但し、インターネットに対する頼り過ぎは禁物である。他人の編集したものを鵜呑み、受け売りし勝ちだからである。

インターネットから得た情報は、あくまで学習の手掛かり

したい。

わたしがこの両紙に最初に目に触れたのは大学三年次であり、読書意欲を大いにかりたててくれた。貧乏学生であったわたしは、これらの新聞を見て、お目当ての図書がない場合、図書館事務員に是非これを購入してほしいとせがむのである。こうして、お陰でわたしの図書購入費は節約され、卒業論文に利用する参考文献の大半は、図書館にご厄介になった。わが大学の図書館にも足繁く通った。特に日刊新聞の縮刷版は関心記事を漁り、見過ごして新聞を切り抜きしなかったものを補完するのに役立った。わたしの研究資料の多くは、このように図書館の蔵書に密着・依存している。

これと併せて、図書に関連する知識も広がってきた。例えば、図書カードの左上に付された図書記号は「日本十進分類法」（NDC。一九二九年創刊）にしたがって記入されているのが後に分かった。NDCは現在、本表編と一般補助表・相関索引編の二分冊（新訂九版）で、主類表は0（総記）から9（文学）に至るまで理路整然と分類されている。四十年ほど前に、アメリカ議会図書館を訪ねて図書を閲覧した際に、その分類表（LC）がNDCと極く似ており、図書検索に至便であった。後に分かったが、NDC作成にはカッター氏編集の分類表（EC）とLCを範にとったものだという。

に過ぎず、これから数歩進んで、他の情報収集を拡大し、図書館などで文献を渉猟しなければ、創造力は生めない。インターネットからの学習手段の限界を実感しなければならない。

塩崎文雄

表現文化学科

銘酒屋略史

―われ面白の、ひとかしまし―

むかし、東京市中に「銘酒屋」というフーズクがあった。どうやら帝都特有の業態だったらしく、訛って「メイシヤ」と呼ばれた。矢場が弓の稽古をするところではなかったのと同様に、銘酒屋は酒を飲ませる場所ではなかった。酒を売るふりをして、色を売ったのである。盛んだったのは十九世紀末から東京大空襲までだったから、前後五十年ほどのことになる。なお、中途に関東大震災が起こって、銘酒屋はその性格を大きく変えた。

銘酒屋は樋口一葉の『にぎりえ』に草創期の姿を現し、永井荷風の『墨東綺譚』に最後のおもかげをとどめている。大

正期には宇野浩二の『子を貸し屋』、室生犀星の『青白き巢窟』に取り上げられているばかりか、谷崎潤一郎の『痴人の愛』にも影を落している。小説ばかりではない。石川啄木の『ローマ字日記』や松崎天民の『淪落の女』、『中央公論』の時評などにも悲惨な実態がうかがわれる。

日清・日露戦争を契機に、東京は大量の流入人口によってふくれあがる。その大半は学歴や職を求める若年男子であった。かれら書生や職工がわずかな暇を盗んで、繁華街に遊ぶ。東京屈指の繁華街は吉原を後背地に控えた浅草だったから、花屋敷の裏手や、吉原への通い路に当たる十二階下の路地に、遊客を喰え込もうと銘酒屋が軒を並べたのである。白首と呼ばれた女の数は一、二千人を超えた。ほかにも、日本橋郡代、芝神明、浜町、蠣殻町など、各所の繁華街や遊廓・花街周辺にも似たような業態の店が数多く出現した。

帝都東京の発展に呼応した銘酒屋は、吉原や品川などの遊廓に集住することを義務づけられた「公娼」に対して、「私娼」ということになる。売春を国家の監視下に置くこととする内務省や警視庁にとつても、遊客を横合いから奪われる貸座敷業者にとつても、銘酒屋の跋扈は深刻な事態であった。また、市区改正事業や震災復興事業のインフラ整備にとつても、銘酒屋街は大きな障害であった。第一次大戦の好景気のさな

かに私娼撲滅令が出されながらも、一向に成果が上がらなかったのは莫大な利権が伴っていたためである。

そこに、関東大震災の災禍である。警視庁はこれを機に、市中の銘酒屋を隅田川以東の玉の井と亀戸に強制移転させた。江戸風にいえば、「朱引線の外」というわけである。さらに玉の井、亀戸の営業戸数をそれぞれ五百軒以下、酌婦数を千名以下に制限し、既存の遊廓とのバランスをとった。要するに、指定地への囲い込みが断行されたわけで、同じ銘酒屋とは言っても、『にぎりえ』などに描かれた明治・大正の銘酒屋と、『漫東綺譚』に名高いそれとは、まるで似て非なるものということになる。

おのおのの生まれ在所から引き剥がされ、都市の片隅で苛酷な労働を強いられる若年男子の群れが一方にいます。他方で、前借金に縛られ、売春に従事する悲惨な女たちがいます。二十世紀前半の東京に住まう人びとの生活や意識ぐるみに、「銘酒屋」の意義は問い直されなければならない。人間存在のもつとも根源的で私的な領域である「性」に向けられた公権力の介入、検閲という名の公衆衛生、性をも商品化し収奪する資本、ひいては性意識や性行為に向けられた道徳のまなざしや、それらを言説化する文学規範の問題がそこには渦巻いている。

『漫東綺譚』の読解をきっかけに、「銘酒屋」というトポスで展開された、これまた人間の営為というほかない都市現象を丸ごとつかみ取れないものだろうか、というのが目下の関心事である。小説、随筆、地誌、見聞記をはじめとして、法令、判例、審議会速記録、統計資料、地籍図、新聞雑誌記事、写真やチラシ、ポスター、素描画集、雇用契約書、町内会誌などなど、捜すべき資料は山を成している。一に根気、二に図書館司書の適切なアドバイス、三に「犬も歩けば」風の天佑を待っている。

篠原睦治

人間関係学科

現場で考え図書館で考える

ぼくは、一九六〇年代の半ば、院生の頃、二年間ほど、臨床心理学の「本場」アメリカで、臨床と研究をしたくて、「精神薄弱」収容施設、精神病院、少年院といった臨床現場に居たことがある。一九八〇年代当初、アメリカではこれら

の施設が縮小されたり閉鎖されたりしていると聞いたので、サバティカルを使って、一年間、取材旅行をした。このとき、ジョージア大学（同州アセンズ）で、政治学研究者、秋葉聰さんに出会った。彼は、その後、「アメリカにおける生と死の政治学」という大枠を抱えて、日本に向けても、幾つもの論文を届けてくれている。ぼくらは、日米間を往復して、「脳死・臓器移植」「尊厳死・安楽死」「障害胎児の発見と中絶」など、生命操作の歴史と現状を考えてきた。

今年（二〇〇六年）の夏、秋葉さんとぼくたち夫婦は、ヴァージニア州内のキャリー・バック「ゆかり」の地を訪ねながら、二十世紀前半に施設に収容されていたキャリーなど「精神薄弱」者たちが強制不妊手術をさせられた歴史とその後を追った。同州は、一九二七年に合憲化された州不妊手術法を使って、キャリーを、その被害者第一号としているのだ。

このたびは、彼女が生まれ育ち、生涯の大半を過ごした町シャーロットビル、彼女の不妊手術の合法性を認めたアマスト巡回裁判所、そして、彼女が収容されていた中部ヴァージニア・トレーニング・センターなどを訪ねながら、インタビューし、資料を集め、写真を撮った。彼女がかつて出入りした福祉事務所（シャーロットビル）のすぐ傍には、州政府が、州不妊手術法とその施策の優生・強制性を謝罪した記念

碑が立っていた。ところで、この「謝罪」は、やつと二〇〇二年になってからのことである。

実は、ヴァージニア訪問に先んじて、ニューヨーク・シティに立ち寄った。姪や若い友人に案内してもらいながら、美味しいものを食い、ミュージカルとジャズを楽しみ、そして、二つほどのミュージアムを見学するといった感じだったが、エリス島移民博物館見学は、その後のフィールド・ワークの第一歩になった。ここでは、移民たちが知能テストを受けさせられ、「精神薄弱」とみなされた者は強制送還されたという展示に引き付けられた。キャリアたちの運命と重なる人々の苦悩がここを舞台としてもあつたのだと想いめぐらした。

東京に戻って、ぼくは、今夏の取材を軸に、彼との共著論文のたたき台を書き上げたが、実は、初めての共著である。とても新鮮な思いである。というのは、いままでは、不慣れになつてしまつた彼の日本語表現の手直しをしたり、雑誌や単行本に掲載するにあたっては校正、編集の仕事をしてきたからである。そして、こんな作業の中で、そして、今回のような彼との取材や討論を通して、このあたりのアメリカ情報を確認して来た。

ところで、ぼくは、三年前に、四十年ぶりに、「精神薄弱」収容施設、E. R. ジョンストン・トレーニング&リサーチ・

いてくれた、同大勤務のSさんが勉強した跡にちがいないと、懐かしく思った。

津野海太郎

イメージ文化学科

研究法はとうの昔に捨てました

もし研究者を「論文を生産する人」と定義するならば、私は研究者ではない。かなしいかな、私には論文が書けないからだ。

むかし『物語・日本人の占領』という本を書いた。第二次大戦中の日本軍によるフィリピン占領期を、日本側の資料とフィリピン側の資料をつきあわせながら、どちらかといえどエッセイ的なやり方でかながえてみた本だった。いまは平凡社ライブラリーにはいつている。

この本がでてしばらくたつたころ、ある高名な関西の研究者が「うらやましい」と新聞紙上で感想を書いてくれた。「私たち研究者にはこういう書き方はできない」とおつしや

センター（ニュージャージー州）を訪ねた。そのときは、この地から始まる臨床と研究を捉えなおす思索の過程を懐古するジャーニーだったが、このたび、キャリアの収容されていた施設で、その歴史を振り返る話を聞くなかで、「E. R. ジョンストン」の名前がよく出てきた。そこで、彼の部下H.ゴッダードとともに、「精神薄弱」脅威」論に立つて「隔離収容と不妊手術」を強調していた人物であつたことを改めて確認した。

秋になって、最首悟さんとの協同授業「現代社会と生命観」で、「キャリア・バック」ゆかりの地を訪ねて」という、スライドショウ入りの講義をした。生まれて初めての試みである。大学院生丹波くんが本格的に応援してくれて可能になったのだが、ぼくも、やつとパワー・ポイントが使って、興奮している。

また、このテーマに関わって、J. D. スミス& K. R. ネルソンの『The Sterilization of Carrie Buck』（一九八九年）を読みたんとずつと思っていたが、アメリカでは絶版だった。大学の図書館で調べてもらつたら、静岡大学にしかなかった。さつそく、取り寄せてもらつて、ページを開くと、鉛筆書きのメモが処々に書き込んであつた。ぼくも編集担当をしている「社会臨床雑誌」に、十年前、当該書のいいねいな書評を書

るのだ。なるほど、私は怠け者だから、一次資料をたんねんに読みこみ、フィールド調査をし、聞きとり調査をし、といった作業はいつさいやらない。フィリピンに足をはこぶことすらせず、たまたま図書館や古本屋でみつけた内外の本だけをたよりに、一冊の本を書いてしまった。研究者にはこういうことはできない。できないというよりも、ゆるぎれない。ジャーナリストだつてそうだろう。

私には論文は書けない。論文の構造や論文の文体をつかつてものを考えることができないので。

正直いつて、したくない、という面もある。論文的知性へのうたがいがいい。だからといつて、そこに居なおるつもりもない。最近、ステイヴン・グリーンブラットの『シェイクスピアの驚異の成功物語』という本を読んだ。アメリカの「新歴史主義」を代表する人文学者が一転して一般読者むけに書いた本。すぐれた学者・研究者というのはいいものだな、と感嘆した。膨大な研究蓄積の上に立つて書かれた「反伝記主義」的伝記。あざやかなものだ。論文が書けない、書きたくない、などというレベルで尻をまくるわけにはゆかないのである。

尻をまくるかわりに何をやるか。研究者の仕事にそうおうの敬意をはらいながら、研究者ならやらない（やるわけにはゆかない）やり方で「非研究」的研究（？）にはげむこと

。目下、『ジェローム・ロビンスが死んだ』という本を書いている。副題は「ミュージカルと赤狩り」。一九九八年、ロビンスが七十九歳で死んだ直後、インターネットでみつけた追悼記事で、この『ウエスト・サイド物語』や『屋根の上のバイオリン弾き』の演出家兼振付家が、かつて非米活動委員会（H U A C）の公聴会で以前の仲間たちの名前を密告していたことをはじめて知った。あわせて、かれがニューディール期の数年間、アメリカ共産党員として活動していたということも。

中学生の頃、『踊る大紐育』というミュージカル映画をみて以来、ジェローム・ロビンスは私にとつての文化ヒーローのひとりだった。

そんなロビンスと、はじめて知ったかれの暗い過去とのあいだの落差にショックをうけ、暇をみては、インターネットをつうじて関連資料をあさるようになった。H U A Cでの証言記録や、死後に出版された何冊かの伝記も手に入れた。研究にあらず。みずからの少年期への私的な義理立てである。遠からず私も死ぬ。知ってしまった以上は、なぜそういうことが起こったのか、その間の事情を多少なりとも納得した上で消えてゆきたい。

プロの研究者ではない人間の「非研究」的研究は、おおむね、そういうふうにはじまる。使命感はない（たぶん）。じぶんが納得したいという動機だけで、いくつかのテーマと並行して漠然とつきあいつづけるうちに、おおくは偶然のきっかけで、なかのひとつかふたつが本にまともなる。大学の教員になってよかったのは、学生にはわるいけれども、こうした私的「非研究」に授業というもうひとつの出口があたえられたこと。

効率よく考えるための切れ味のいい道具（方法論とか批評理論とか）がほしいという欲求は、かなり若いころに捨てた。もはや古書店をまわり歩く体力もない。いまはインターネットと近所の図書館をブラウジング（つまみ食い）してまわるのがたのしい。各種図書館と電子書店のO P A C（オンラインで利用できる電子化された書誌目録）がなかったら、もうなにもできない。

徳永潤二

経済学科

二者択一的な認識を越えて

金融グローバル化の「光」と「影」

——研究の問題対象——

一九九〇年代以降、金融グローバル化を背景として、国境を越えたマネーの動き（国際資本移動）が拡大しています。国際資本移動の拡大は、各国の経常収支赤字をファイナンスすることによって発展途上国の高度経済成長（例えば「東アジアの奇跡」という「光」をもたらす一方、各国においてバブル絡みの経済成長を生じさせ、反対に通貨・金融危機（一九九七年の東アジア通貨危機など）を頻発化させるという「影」ももたらしています。

「世界の金融「コングロマリット」としてのアメリカ

——研究のオリジナリティー——

国際資本移動の中心に位置するのがアメリカです。九十年

代以降、アメリカは自国の経常収支赤字以上の外国資本を集め、それを自らの経常収支赤字ファイナンスに充てる一方、その経常収支赤字以上の余剰分を経常収支赤字国に对外投资しています。主流派経済学によれば、アメリカは国際的に金融仲介を行う「世界の銀行」であり、国際経済の成長に寄与していると捉えられています。

アメリカは他国にはない「特権」を持っています。それが国際通貨ドルです。世界最大の債務国にもかかわらず、「双子の赤字」（財政赤字・経常収支赤字）を続けられるのは国際通貨ドルという「特権」を有しているからです。国際通貨国アメリカの役割は、主流派経済学の見解のように「経常収支赤字以上の外資の余剰分を、再び投資する」という「受動的な」ものではなく、国際通貨ドルを供給する、すなわち新たに国際的なマネーを創り出すという意味で「能動的な」性格を持っています。ここではアメリカは国際資本移動の「起点」となっています。さらに二〇〇〇年代前半、その役割は従来の銀行、証券、保険などといった業務の垣根を越えることにより、アメリカは「世界の総合金融機関」（金融コングロマリット）化（an active financial conglomerates in the world）しているのです。

上記のような主流派経済学（欧米中心）の見解は、マーケットメカニズムを高く評価するもので、学界をリードするだけではなく各国政府と国際機関（IMF、世界銀行など）の経済政策の立案において大きな影響を与えています。それは各国に自由化と構造改革に求める理論的基礎となっており、金融グローバル化を支援する根拠ともなっています。すでに指摘したように、主流派経済学の見解は「経常収支赤字以上の外資の余剰分を、再び投資する」というように、国際的に一定量のマネーを前提としてそれが国際的に仲介されることを問題にしています。私の研究は、主流派経済学のこのような静態的な国際資本移動論から脱し、国際通貨国アメリカが国際資本移動の「起点」であることを踏まえた上で、国際資本移動を動態的に分析することを目的としています。今後、この動態的な分析のために、「貨幣はどのように供給されるのか」（マネタリストとケインジアンとの論争）といった金融をめぐる理論的な論争を再検討し、それを踏まえて国際的な貨幣・金融現象を説いていく必要があると考えています。

アメリカが国際通貨ドルという「特権」を持っているとしても、無限に「双子の赤字」が続けられるわけではありません。将来、「双子の赤字」が行き詰まり、国際通貨ドルに対する信認が低下すれば、国際金融システムはドル一極からドル、ユーロ、「アジア共通通貨」からなる多極通貨システムに移行し、アメリカの覇権は衰退するでしょう。アメリカ覇権衰退後の国際経済を主導するのは、単一通貨ユーロを導入したEU、オイルマネーを蓄積する産油国、それとも高度経済成長を続ける中国やインドをはじめとするBRICsなのでしょう。現在の日本のグランド・ストラテジーをめぐる議論では、「アメリカか、アジアか？」という二者択一的なものが多く見受けられます。しかし、今こそ、中尾茂夫（『トライアングル資本主義』東洋経済新報社、二〇〇六年）が指摘するように、このような二者択一的な認識を越えて、「アメリカとアジア」とも連携を強めていく多角的な認識が必要とされているのです。

長尾洋子

表現文化学科

道具（方法）を研いで 必要にそなえる

私がとりくんでいるのは、近代以降の日本の文脈において生活と芸能との関係、地域社会と文化とのつながりが、どのように展開してきたかを明らかにする研究です。とくに「地方文化」や「民俗行事・芸能」として地域的な特色が認知され、アピールされているような現象に注目しています。

研究の前提として地域社会や生活文化の移り変わり、国土計画や地域政策・文化政策に関して知識を大づかみに得ることが必要ですが、これは主に第二次資料を用いています。その一方で、生活と芸能との関係を実際にそれに携わる人々の視点から見、考察するために、実際にその人たちが住む世界に自分も身をおくことを心がけています。

私が現在力を注いでいる調査では、富山県富山市八尾町で行われている「おわら風の盆」という民俗行事にターゲットを定めているので、時間を見つけては現地の知り合い宅に滞

在し、町の様子を観察したり、地域活動に顔をだしたり、聞き取りを行ったりというようなことをします。一般に、このような現地調査を、たとえば一年以上にわたって調査者自らもその社会の一員となるくらい密に行う場合、人類学という「参与観察」という調査法を行っていることとなります。

私の場合は一回の滞在が二ヶ月以上におよぶことがないので、純然たる参与観察には当たらないかもしれませんが、十年来積み重ねてきた八尾町との付き合いをふりかえってみると、いつも世話になつていてるT家では娘のように受け入れてもらい、またそのように地域社会でも見なされているので、かなり参与観察に近いといえるでしょう。また「おわら風の盆」では、町内の十代から二十代後半までの女性が踊る踊りがあるのですが、私自身が二十代後半のころ、ある町民の方が私を踊り子として練習や祭りに参加することを許してくれた年がありました。参与観察では文化活動の深部に参加できればできるほど良質の研究成果が期待できるわけですが、外部からの調査者という立場をわきまなくてはなりませんから、無理強いはできません。研究の意図を理解してくれた町民自身から、「踊り子をやってみなさい」との提案があったときはとても嬉しかったし、その後の研究につながる発見もあつたので貴重な体験となりました。

このように、参与観察は文化の実際、文化の現在を自分自身の体を通して知りうる有効な方法ではありますが、ややもすると近視眼的になりすぎます。正直なところ、私も大きな知の潮流、制度の変遷、文化編成のなかで研究対象を捉える視点が弱くなりがちでした。このような壁に突き当たったときは新たな、より大きな視点を獲得するために、それまでとは異なる傾向の文献にあたったり、研究仲間と議論を交わしたりします。自分が抱えている課題について、異なる角度と射程から話すことができる仲間と出会い、よい関係を培っていくことも私にとっては研究法の重要な一部です。

さらに観察や聞き取りといった、人間の感覚や記憶に基盤をおくデータが蓄積されてくると、それを吟味し、資料によつて裏づけ多角的に検討する必要性が増してきます。「おわら風の盆」は、八尾町のもうひとつの大きな祭り「曳山祭」とは異なつて、「神事」ではないから記録はほとんど残してこなかった、というのが十年以上前に私が調査を始めた当初聞いていた話でした。しかし実際には、行政もかなり関わっている行事なので、運営や方針に関しては行政資料が相当存在します。これをどう入手するか、閲覧させてもらうかが勝負どころです。自治体の図書館等にも所蔵していないような内部資料については、ある程度調査内容を限定したうえで、

役場関係の人脉を通して閲覧の依頼をするのが経験上もとても効果的です。

その他の資料については、最近設立された「おわら資料館」に集められた資料が「宝の山」であることを発見しました。雑多ではあるけれど、大正時代に遡るものもあり、口碑では伝えられていないような事実を示すものも多く、すべてが第一次資料として使えることを考えると、まさに垂涎ものです。ところが資料館では人手不足のために整理作業が滞っていたという事情がありました。そこで、資料館に正式に調査依頼をだして、とくに整理が滞っている部門については、私とアシスタントが資料整理の実質作業を行うので、研究のために閲覧・複写をさせてほしいと提案したところ受け入れられ、地元の方と協力しながら、史料の掘り起こしに携わることができました。さびたホチキスやクリップを取り除きながら、文字通りホコリまみれになつての作業でしたが、自らの研究と資料館の双方にメリットがあるという点で、意義深い調査経験でした。

人間が生きている現場というのは、さまざまな要素や力が混在しています。それを掻き分けていく（つまり目的をもつて研究する）にも、ひとつの道具（方法）だけでは足りないもので、いくつかの道具を使うことになります。今回紹介した

以外の方法も組み合わせて研究を進めています。適切な道具を必要とときにすぐ使えるよう研いでおく、職人と同じ心構えで自分なりの研究法を磨くべく、精進の毎日です。

野中浩一

人間発達学科

「簡単に納得するな」

大学には理科系で入学したものの、なかなか進路が定まらず、結局のところ理学部で生物学を選択した。それは半ば消去法だった。工学や物理学で必須と思われた高等数学にどうにも頭がついていかなかったから、これが基本道具じゃつらいな、と感じていたことも大きかった。それに漠然とではあるが「いのち」には不思議がつまっている気がしていた。生物学を選んだからといって、数学的道具やら、電気回路理解能力やらから逃れられたわけでもなく、甘かったのだから…。

「生き物って不思議だなあ」と、学費を払って「お勉強」をしていたのだが、本腰が入っていたとはいいたい（青年は

いそがしい）。まわりを見渡せば、半数以上が研究者を目指すようなようだった。運動部に所属しながら、じつは団体競技が得意とは自覚できず、世のため、人のためという仕事ができるのかどうか確信がもてなかった私にも、理学部の研究はそれなりに居心地がよさそうにも見えた。就職は先送りにして、ひとまず大学院へ。しかし、これでいよいよ研究者としてお金をもらう道が濃厚になった。生き物の仕組みを納得するためのモデルをつくって検証する作業は面白そうだったが、「面白いねえ、で、それが何の役にたつの？」と問われる頻度は高い。もはや研究者も職業であつて、有閑貴族の余暇としての研究は、成り立つわけもない。

修士課程も二年目を迎えた夏、基礎医学の講座から助手としての就職の話が舞い込む。親のすねかじりもいい加減にしないと、と考えていた私は、迷いつつも転身を決心した。どちらにせよ研究をするのだから…。そのころ、挨拶にいった動物学の大教授が言ってくれた言葉が今も耳に残っている。

「医学部に行ったら、戻ることを考えないで、医学の研究をしてください」。医学研究は理学研究とちがつて、人間の健康や福祉に直接貢献するものでなくてはいけないから世界が違ふのだよ、という意味にも聞こえた。研究つてやはり人の役にたたなくてはならないのか…。それ以降、結局のところ

直接的な社会への還元がない「医学」研究をしてきたわが身にとって、この傷はそのまま小さく残し、残している。

それから二十年、論文にまとめることを目標とする研究者として医学部です。ともすれば、人類の健康増進というお題目に隠れるような形で、論文作成のための小手先を研ぐ暮らした気もする（そのわりには形になった論文は少ない）。その間に身につけた、わずかばかりの研究の手法たち。しかしそれについて書くことは、いかにもハウツーなのである。Webにころがっていきそうな料理レシピは書いても、辰巳芳子さんの料理本にはならない。

そして六年前に本学に……。周囲の環境が理学部→医学部以上に激変して感じることは、医学研究で身についたある種の抽象化、あるいは研究のための単純化（モデル化）は、さほど重要でないのかな、ということである。医学あるいは自然科学というのは、複雑な現実を単純化して切り取り、世界を簡単に納得したがつている。病気だつて万能ワクチン一発で決着をつけたい。もちろん、学問と呼ばれるものであれば、抽象化と無縁ではありえない（そこが苦手な学生も多い）が、新しく踏み込んだ世界は、どうも「簡単に納得するな」が国是のようでもあった。こぼれおちる細部を大切にしている、とも言えるし、反証可能性を担保するより一回性を切り捨て

3 辞書は引く。言葉の意味は自分で考えよう。

以上だが、若干の説明は必要だろう。

この1と3ともに命令口調になっているのはなぜか。それはすべてがK大学院で修行中の小生に（だけではなかったかもしれないが）、中国文学の文献学的研究で高名なY教授が指示した言葉だったからである。

このうち1は生涯小生がほぼ守り、一つの作品はたとえ何百巻という巨大なものであろうとも全部読み通さぬうちはそのことについて語るまい、と決意したほどである。

2、3についてもその通りに守った。インターネット等、便利な世の中になつても小生のやり方は変わらない。それで今日まで通してきたと信ずる。また当時はそれぐらい、今から見れば不便な時代だったのだ。

前田耕作

名誉教授

経験と読書の往復の中で

ないとも言えるのか。だから、私の考えていた研究法は、一面ではなんだか神経質にやせ細つたものにも見えてきたし、一方で、そんな簡単に納得しない研究のための方法なんて、いったい学生にどう教えるというのか、とひっかかる気持ちもある。何十人かに一人が「やっているうちにたまたま気づく研究法」というのでは、うーむ、秘技に近いなあ。学生にはこう言いたい。伝承されてきた小手先の道具も磨け。でも、真の改革者はそんな道具を超えたところから出ると思うよ。それは研究だけでなく、人生のあらゆる局面でそうじゃないかな。

橋本 堯

文学科

恩師のおしえ

「私の研究方法」とは次の三カ条である。

1 本は始めから終いまで読め。

2 索引では学問はできぬ（索引は使うな）。

なにごとくも方法が先立つと結果は不毛な場合が多い。大地が汗してしつかり耕されることなしに、どんな播種も豊かな実りにいたることはないだろう。少年時代、私は毎日トンボを追っかけて、たもを片手に野原をいつまでも駆け続けた。母は殺生をあまりしてはならないと不機嫌であったが、たもの先をくると輪をかいて逃げてゆくトンボをいつまでも、どこまでも追いかけた。

小学校に入るまでの記憶だが、老年となつたいまでも、あるいはだからこそなのかもしれないが、この跳ねるような光景を忘れることはない。父がある日買ってくれたリンネの博物誌の本が、私の最初の読書の始まりであつたように思われる。なんとなく、すべてのものは関連しながら、系統立っているということを感じさせてくれた。

走り回る肉体と読書との出会いは、その後もずっと続き、いまでも変わらずそうである。マラルメのように、「われ万巻の書を読み、されど肉体は悲し」とは逆の人生を生きてきたし、なお生きている。

研究などというものを意識したのは、やはり高校の終わり近くになつてのことであつた。受験といつても、友だちから借りたボードレールの全集を読みながら、好きだつた英文法の頁だけは毎日めくるといった程度のことであつた。大塚文

法、斉藤文法、細江文法と読みふけた文法書が、なんとなく自分の中でそれなりの理屈を、私流の方法序説をかたち作っていったように思う。

ある日、通学の汽車の中で、旧制高校を出て大学に通っている高木さんという人に出会った。私が読んでいる本を見て、声をかけたのだという。大学で日本の近代文学を専攻している高木さんは、あれこれと小説の話をした後、「春の会」という近代小説の研究会に出てみないかと誘った。「そこにとても鋭い視点から小説を読む人があるんだ」、と私の心をゆさぶった。好奇心にもそそられて、「春の会」に顔を出したとき、ひと際威容を放っている人がいた。それが高木さんがいつていた丸山静さんであった。私はそれまで詩人の丸山薫さんは、私淑していた友だちがいたので知っていたが、静さんはまったく知らなかった。静さんは当時、名古屋大学の事務員で、左翼運動の中心的人物だったと後で聞いた。島崎藤村の作品をめぐる、杉浦民平さんや北村透さんや丸山さんらが激論するのをただ固唾をのんでみまもるばかりであった。一つの文学作品がこんなにも異なった角度から読めるのか、なぜだろうか、ちよつぱり方法意識のようなものが生れたのはこうした経験からであった。

文芸批評家丸山静に出会ったことが、私の生涯を決定した

松枝 到

イメージ文化学科

記憶と徘徊

ぼくの専門は美術史である。なあんていうと、みんな嘘だろうという顔をする。でもこれは本当のことであつて、ぼくは十六世紀イタリア美術に関する論文で学位を取っているのだ。一応は、芸術学の修士なのである。ただし、その自覚は薄い。なぜかといえば、思いつくまま気の向くまま、さまざまな学問分野を渡り歩き、あれこれ駄文を弄してきた経歴があるからである。アカデミックな論文は四編を数えるのみ。

大学の卒業論文、大学院の修士論文、大学紀要に書いた一編の論文、そして自分が編纂した論文集の基調論文（松枝編『ヴァールブルグ学派』平凡社）だけしかない。あとはなにがあるかといえば、文化現象や文学、歴史、風俗、音楽や映画・演劇の評論、そして時事的な社会批評など。美術史に関係する学会にも所属していないし、頼まれれば何でも書くという姿勢に徹してきた。いわばジャーナリストなのであつて、

ように思う。それからは、五軒長屋のボロ家に住む丸山さんの四畳半の狭い書斎が私の研鑽の場となった。大学に入ってから事情は変らなかつた。大学のカリキュラムも、自分の中に求めるなにかがあれば楽しくこなせることを知った。大学の帰り道、丸山さんの小さな書斎を訪れることがなにより嬉しいことであつた。授業があつたわけではない。ひたすらにフランス語の本をテキストにして、ともに深く読むことを繰り返していただだけである。ソシュール、メルロー・ポンティ、レヴィナス、現代思想の新しい芽生えを実感させる場であつた。不勉強であれば、先生、いつのまにか私たちはそう呼ぶようになっていたが、先生の激鱗にふれてたちまち破門を申し渡された。それからずっと、先生とともに「現象学研究会」や「現代批評の会」をつくり、亡くなるまでともに歩み続けた。『デュメジル・コレクション』全四巻（ちくま学芸文庫）は先生との最後の共働の結実である。

研究法などというものはない。自分の中に芽生える方向に向かって、自分であらゆるものを拾い集め、取捨を繰り返すほかはない。なにを捨て、なにを拾うのか、このとき立ち働く眼こそ重要だが、その眼は経験と読書の往復の中で培われるものだ。そしてなによりも大切なことは、方法意識を自然に会得させ、鍛える良き師に出会うことだ。

けつして学者ではない。したがって「研究法」などもってはいないし、いきあたりばつたり、その場その場の「しのぎ」しかしていない。

とはいふものの、研究法に関わる訓練を受けたことは確かだし、とある出版社の編集者をしていたこともあつて、それなりの「読む」技術を身につけていることは自負している。すでに美術史からは遠く離れているものの、見えざる知識の森に分け入る方法は美術史から学んできたことでもあつた。

かつて「詩は絵のように」(pictura poesis) という語が古代ローマ詩人のことばとして流れたが、言語表現と絵画表現は抜きがたく密接な関係をもっていた。だからこそ、ものいわぬ絵画といえども、その背景には多様な言語表現が隠れているのであり、それを求めるために、ぼくらはさまざまな図書館に通い、あれこれ文献をあさってはイメージの源流を求めている。実際に既成の学問領域をこえて、神話や歴史・文学は当然のこと、哲学から経済学、天文学から社会学にいたるまで、あらゆる分野の書物に格闘を挑まなくてはならなかつた。そうした学問ジャンルを越境してきた経験が、ぼくを一個の閉じた学問ジャンルからはずしたのであり、自分の専門性にあいまいにすることにもなったのだが、いまさら別に悔やむことでもない。結局のところ、そうなつてしまったのは自分

の好奇心のなせる技であつて、望むところでもある。

読みたいテキストを探しだし、手に入れ、読み、何事かを考える。またその前提として、自分はなにを求めているのか、どのような情報をほしいのか、それを手に入れる手だてにはなにがあるのか。そうしたことについては、それなりの技術と勘とを獲得していると思う。引用文や文献注、索引やデータベースの紹介などが手がかりとなるが、しかしなにより読書の記憶にまざるものはない。そういうばあの本に書いてあつた、この本ならあの情報をたぐり寄せることができる。

このような記憶のインデックスを培うには、好奇心のおもむくままに雑多な本を読むことにまざる鍛錬はないのだ。そしてみずからの好奇心を拡張するには、経験の拡張を図ることにまざるものはない。書物のなかで旅をする。多様な人生のフィールドワーク。皮膚の経験が読書を誘い、読書の経験が五感を拡張する。そしてその感覚を他者（「わたし」も一個の他者として）へと開示することだ。そうしてはじめて個人的経験は読みうるものとなるだろう。それが研究であつても感想であつてもかまわないが、そのダイナミズムを自覚することが表現することの基本ではないか。

いま現在、自分の学問的テーマが何であるのかはわからなけれど、強く「現在」を読み取ろうとしている自分について

来た球を打てそうなら打ち返すだけである。好球必打を目指しているのだが、現実には空振りばかりではないかな。

話が長くなるかも知れないがひとつ我慢して読んで欲しい。なぜなら、「神話学・宗教史学」を専門分野と書くことになるまでを理解してもらうには、かなりの回り道が必要だからである。話は高校時代にまで遡る。はじめに興味を持ったのは言葉と文化だった。ホストファミリーの一員に加えてもらい、カリフォルニア州の高校に一年留学したことがあるのだが、他の国々からやつて来た留学生たちの英語のうまさには本当に驚いた。また英語以外にフランス語、ドイツ語も自由に操るスウェーデン人学生や、スペイン人とイタリア人とブラジル人がそれぞれの言葉で不自由なく話し合っている光景にもショックを受けた。

帰国してから、受験勉強の合間にスペイン語やフランス語の入門書を眺めてみると、それらがとても類似していることに気づいた。そして大学に入学して、ギリシア語やラテン語、そして言語学も勉強すると、西洋の言葉のほとんどは、「インド・ヨーロッパ語族（印欧語族）」という共通の祖語が枝分かれして発展したもので、類似している、したがって、相互に通じやすいし、学びやすいということが分かった。

では言語が共通ならば文化も共通ではないのか？そういう

では自覚がある。しかもそれは「わたしはどこから来たのか、わたしは何者なのであるか、わたしはこれからどうなるのか」という哲学の根本命題に接している。それさえ忘れなければ、研究法はおのずと浮かびあがってくるだろう。

松村一男

イメージ文化学科

私がしているのは果して研究なのか？

専門分野を書くときには、「神話学・宗教史学」と書いている。しかし、自分がしていることは、果たして「研究」なのか、そしてまた、それが「神話学・宗教史学」なるものなのか、自信はない。いい歳をして居直るようで気恥ずかしいのだが、「面白そうなもの」を調べて、勝手にタイトルをつけた授業で話して、求められれば、出来る範囲内で、相手の希望と自分の守備範囲の折り合いをつけた駄文を提供しているだけである。だから、学者としてあるべきテーマとか研究法とか、誰にも負けない専門領域があるとはとても思えない。

思いを感じていたとき、インド・ヨーロッパ比較神話学というものに出会った。そう、現存する言語資料の類似から、その再建に進むのと同じ手続きで、インド・ヨーロッパ語族地域の神話資料の類似から、その再建を試みる研究である。吉田敦彦先生の本（『ギリシア神話と日本神話』みすず書房、ほか）を読んで、それを知った。別の大学の先生だったので、授業を取っていた何人かの先生に話をしてみても、その中の一人の先生に吉田先生の知り合いの方を介して紹介していただき、研究室を訪ねた。そして吉田先生のフランスでの先生であるジョルジュ・デュメジルの研究を紹介され、二人の業績に学びつつ、古代ローマ宗教におけるインド・ヨーロッパ神話要素というテーマで卒論を書いた。

浮世離れし過ぎたそんな研究ばかりしていたので、大学を卒業しても、もう社会人Ⅱ会社員にはなれない身体になつてしまった。あとは大学院に行くしかない。そして入学したのは宗教学の研究室だった。爾来、三十年近く。研究分野はインド・ヨーロッパ語族という枠組みを遥かに逸脱し、世界のあらゆる時代、地域の神話を相手にするようになった。だって、神話とは「最古の哲学」であるばかりでなく、「最古の博物学」とさえ呼べるものなのだから。天体、動物、植物、人間、親族、男、女、戦争、愛、憎しみ、死…神話はあらゆる

る素材を取り上げ、それについて考え、物語を作る。これは面白くて止められない。そして神話はしばしば儀礼や信仰や宗教とセットになっている。ギリシア神話だって、ギリシア宗教史の一部なのだ。ということで、今のわたしはあらゆる現象、出来事を神話や宗教として考えてみて楽しんでいる。

そうそう、図書館についても書かねばいけないのだから。

わたしの関心はバラバラなので、図書館のようにあらゆる分野の知識を揃えている空間なしには、何にもできないのだ。就職して自分の研究室を持つまでは、毎日のほとんどを図書館で過ごしていた。もちろん今でも図書館は頻繁に利用しているが、研究室も持てる生活になったので、つつい、身近に好きな本を置いておきたいという誘惑に負けてしまう。そしてその結果、今では（入ったことのある人は知っているだろうが）わたしの研究室自体がほとんどミニ図書館化してしまっている。

三浦郷子

経済学科

化学物質の選択毒性を追う

私の研究は、化学物質の細胞に対する影響を見るものです。メチル水銀によって引き起こされる水俣病では、神経系が特に強く障害を受けます。なぜ神経系が選択的に障害を受けるかは、まだ解明されていません。この研究に私がとりかかったきっかけは、アメリカ合衆国ニューヨーク州のロチェスター大学に留学していたときでした。そこでは、神経様細胞に分化することで知られているPC12という培養細胞を用いてメチル水銀に対する反応を検討していました。細胞のほとんどが死んでしまう高濃度のメチル水銀で処理した細胞を観察していたとき、ごくわずかの細胞がその条件下で生きていることに気づきました。なぜ生きていることができるか驚くとともに、この細胞は、特別の能力を持っているのではないか、と考えました。そこで、このわずかに生き残っている細胞を増殖させた後、バラバラにしてそれぞれ株としてク

ローニングし、二十から三十種類のメチル水銀に対して強い細胞株PC12TMSを樹立したのです。これらの株は、メチル水銀耐性株として世界で最初に報告されました。また、帰国する際、日本へ持ち帰ることが許可されました。

これらの細胞株を用いて、メチル水銀の毒性に対して強くなっている原因の研究を始めました。はじめに、細胞へのメチル水銀の蓄積量を測定した結果、メチル水銀に対し、強い細胞株ほどメチル水銀の蓄積量が少ないことがわかりました。微量のメチル水銀の測定には、放射性同位元素の水銀（Hg 203）を用いるため緊張を強いられました。次に、メチル水銀細胞への蓄積を決めている「取り込み量」と「排出量」を測定しました。その結果、メチル水銀に強い株ほど排出量が高いということが判明しました。さらに、細胞からのメチル水銀の排出は、グルタチオンが関係しているという事実があったため、これらの株のグルタチオンの量を測定してみました。その結果、メチル水銀をより多く排出する細胞株ほどグルタチオン含量が多いという結果が得られました。これまでの結果から、細胞内のグルタチオン量が、メチル水銀に対する強さ（耐性）を決める重要な要素であり、グルタチオンを多く含む細胞株ほどメチル水銀の毒性に対し強い性質を示すようになることが判明したわけです。

次の実験として、いろいろな臓器（皮膚、腸、子宮、神経系など）由来の細胞株を培養し、メチル水銀の蓄積量、グルタチオン量、メチル水銀の「取り込み」及び「排出」などの

違いを測定してみました。その結果、神経系由来の細胞株が最もメチル水銀を蓄積しやすく、グルタチオン量が少ないという結果が得られました。すなわち、メチル水銀が神経系細胞に対し特に強い毒性作用を示す原因のひとつに神経細胞内のグルタチオン量がほかの臓器の細胞に比べ少ない、という特性が関与していることが示唆されました。これらのデータは随時、専門の英文雑誌に報告され、五報の論文になりました。

三上豊

芸術学科

資料を集め、編集し、本にする

私は美術史を研究しているというよりも、主に美術研究のための資料制作に関わってきた。美術図書、雑誌などの編集

という仕事もその一部だと考えている。広義の意味ではアート・ドキュメンテーションともなろう。だから研究法と言っても恥ずかしいかぎり。アートのように未知の知覚をよびおこす仕事ではない。

かつてフリーの編集者として、インターネットはない時代だが、十年以上食べてこられたのは、資料に辿りつく嗅覚を鍛えてきたことがあるかもしれない。出版社に在籍していたときは資料室があり、そこを拠点に資料を探せばよかった。フリーになって、仕事を受けた新聞社や各出版社の資料室に潜り込み、ここにはこんなものがあるとあたりを付けておくこともあった。

非常勤講師で、本学と多摩美術大学に行っていたとき、後者の閉架書庫にはずいぶんとお世話になった。また、昨年本学の図書館に画廊の展覧会カタログを入れていただいたのは、他館にない特色もねらいだが、たまったカタログが自分では整理できずに困っていたこともある。整理不得意なドキュメンタリストとはなさないしだい。

私のテリトリーは、日本の現代美術なので、国会図書館はほとんど縁がない。戦前期の新聞ぐらいが対象となる程度で、対象となる資料が国会にないのだ。では、どこにあるかと言うと、上野の文化財研究所の情報室、今は本場に移転してい

る整理された資料一覧は、なんの解説もない表のような形をとり、冷たいデータだけになってしまっていることがある。そこには担当者が整理、格闘していく時に感じた、資料が呼びかけてきた手応えが反映されていない。もちろん、そうした資料に興味がない人間が機械的に扱えば、それまでのことだが。

そうした冷たさとは別に、研究者が遺族から特別に頂いた資料を、自分で抱えこみ、特権的に利用、自分の論理に資料を組み入れてしまうこともある。熱き想いが先立ち、読み違えの果てに第三者の校正すらもないようなものが印刷物としてでてくる。私が今取り組んでいるのも、こちらになりがちで、いつも「急ぐな」と自分に言い聞かせている。まあ、私のテリトリーは、それほど大きなことではないので、問題になることはないのだが、記録集を出してもそれが終点でないことを、つねに意識している。刊行した記録集は、はじまりであり、それを見、読み、使う人が更新していくための資料である。

これからも、おそらく二年に一冊ぐらいの間隔で、日本の現代美術の資料集をつくっていきたいと考えている。現在は、学園報三〇八号に書いたようなことに取り組んでいるが、次回、現在交渉中のある故人作家の残した資料をまとめてみたい。熱くもなく、冷たくもない、参照した人が少しホット

る東京都現代美術館の図書室などである。文化財研のほうは、明治・大正まではともかく、やはり現代美術の資料は乏しく、近年、資料コレクターの笹本繁男氏の蒐集物が入り、徐々に充実はしてきている。都現美のほうは、かつて上野にある時、研究者、編集者は閉架書庫に入ることができたのだが、いまはできない。誠に残念なかぎりだ。

しかし、今、私がこつこつ制作してきているのは、画廊の展覧会記録である。その資料が上記のところに充実していたら、そもそも記録集など制作する必要はない。資料を集め、編集し、本なりの形にしていけることが、研究といえるかは疑問だが、そこから学ぶことは多い。

作業を進めるうえで、いつも壁にぶち当たるのは、どう資料を見せるかである。DVDなど新しいメディアへの対応も考えられるが、例えば、冷たさと熱さということを取り上げてみよう。

美術館には、郷土の美術家の資料が寄贈されることがある。とくに望むのもでなくても収蔵され、多くは段ボールに入ったまま眠っていることが多い。その資料の一覧を作ること、図書館に寄贈される図書の整理とは違い、薄っぺらなチラシの類もあり、分類自体が担当者の裁量によることが多く、なかなか統一的なラインが作りにくい面がある。よく目にする

になれる、そんな資料集をつくってみたい。

三橋修

人間関係学科

禁欲？それがむずかしいのです

ナントイッテモ、定年デアル。二〇〇七年四月以降は、何も義務がなく、暇のみがある。

思い起こすと、僕は、図書館でゆつくりと読書三昧をしたことがない。梅根記念図書館にもずいぶんお世話になったし、国会図書館にもお世話になった。しかし、いつもせわしく動き回っていた。コピー機の発達も一つの理由であろう。それにしても開架式の本学の図書館はそれなりに眺める面白さがあつたが、国会図書館にいたっては、なんだか小走りに動きまわっていた自分が思い出される。存外、ロンドンの大英博物館の図書館やニューヨーク市立図書館の方が、「通った」という実感が残っている。それにしても期間に限りがあつた。と言うわけで、定年後には、ゆつくり図書館で読書

を楽しむ、ということをお柄にもなくやってみたいと思つてゐる。

では何を読むのか、と言われると、間口だけは大いに広げてきた僕にとって、おいそれと「この領域の本だ」と決めつけることが出来ない。

とりあえずは、ある時代がどんな観念を「発見」したのか、ということをお気にしている身にとって、それなりに江戸期（「女・子ども」の発見）と明治期（「臭い」と「セクシュアリティ」の発見）を論じて来たが、さて大正期に入ろうとした時、縁があつて春画を論じてしまつて、時代を後戻りさせてしまい、その上、学長などという俗事にかかずらわつて中断してしまつた大正期のものを、そろりと眺めることからはじめよう。ずいぶん昔のことだが、何人かで「大正文化」の研究会をやつて本にすることになったが、僕はどうもあと一つ大正期が分からず逃げ出したことがある。その自分への落とし前をつけなければ。

落とし前と言へば、モンゴル人たちを追つて三年間、様々な国や地域をめぐつたが、報告書一篇を提出しただけで終わつてゐる。この決着も考えなければならぬ。

それに、暇があるなあ、と思うと、更なる欲望が芽生えるのを押さえることが出来ない。これまで、授業では欧米のこ

も大正期にある。

とまあ、こんな欲をかいても、その成果をどのような形で発表できるかも不明である。もしかしたらば、万感の思いを込めた小さな含み笑いで終わるかもしれない。

いや、本当に必要なのは、禁欲かもしれない。

三宅輝幸

経営メディア学科

理論と金融市場の発展的連鎖への 限らない挑戦

理論と市場の間の往復

私の研究のベースは常に現実の金融市場にある。私の研究領域は国際金融、外国為替をコアとした金融の世界である。こうした領域には当然、立派な理論が構築されている。学問であるから、そうした理論を学び、さらなる発展に努める必要がある。しかし、この領域が自然科学などと異なる点は、ベースとなる理論が変化することである。「真空状態」における実験などから導き出される絶対的な真実というものは見

とお喋りし、その知識を隠し味にして日本のことを論じて来たが、そちらも表の顔にしたいところ。それは欧米における黒人との関係史とでも名づけられるものである。立派な思想家の本よりも、大勢を決めているのは、書いている本人は大真面目でも、今から見ればトンデモ本マチャイなしという多くの本である。こちらの興味は、下手をすると新たな文献を求めて、禁煙を我慢して遠くの国へ足を伸ばさなければならなくなるかもしれない。

では、こうした楽しみの結果、何が出てくるのか？ これは自分でも分からない。何しろ方法は無手勝流である。ただ、はつきりしているのは、その時代その時代の人々が、何を見たり聞いたりして笑つたのか、あるいは泣いたのか、それを探ることが肝心である。江戸期を考えるにあつて、笑話や浄瑠璃に重きを置いたのも、それを知りたかつたからだ。笑話などから時代を読もうとするのは、オーソドックスな学者にはとんでもないことらしいが、ある意識が広く存在していなければ、それをくすぐる笑話は成立しない、というのが僕の特論である。想像力を働かせれば、そこにどんなタブーが存在していたかも知ることが出来る。

そしてもう一つ、描かれた日本人像。僕の見立てによれば、現在のアニメに描かれている主人公たちの描かれた方の源流

付けることが難しいといえよう。こうした状況に加えて、私の研究者としてのベースが金融市場における実体験にあることが、現在の私の研究手法を決定づけている。すなわち、常に理論と現実市場との間を往復しながら、新たな理論を探り構築していくのが私の研究手法である。私が金融の世界に足を踏み入れてからでも、すでに大きな変革の波が金融の根底を変化させてきた。その一つは「金融の自由化」であり、次には「金融手法の高度化」、さらには「金融のグローバル化」である。

金融の自由化

金融の自由化は金融理論より金融市場やその参加者の活動に大きな影響を与えたといえよう。金融取引を自由に行うことは経済活動の当然の姿でありながら、関係者の当惑は計り知れないものがあつた。中央銀行が決める公定歩合を基準に、預金金利も貸出金利もすべての金融機関に共通に決められるという規制の時代が長く続いたためである。こうした状況下では、金利の変動に対応して、利益を最大化し、リスクを最小化するという、当然の経済活動が機能しなかつた。金融が自由化されてはじめて金融理論が生きることになつたといえよう。

金融手法の高度化

逆に金融理論が金融手法や金融市場を大きく変えることになったのが金融手法の高度化である。金融手法の高度化はそれまでの金融理論では不可能とされてきた取引を可能にした。「金利変動のリスクは避けられない」、「異常気象のような天候異変に伴う被害は甘んじて受け入れざるを得ない」などという問題は金融手法の高度化により、状況が一変した。金融先物取引、金融オプション取引、金融スワップ取引などデリバティブ（金融派生商品）の開発である。オプションの起源は古代ギリシャに、また先物取引の起源は江戸時代の大阪・堂島にあるとされるが、現代の金融理論として完成をみて初めて、金融理論が金融市場とその取引を大きく規定することにつながった。

金融のグローバル化

金融自由化とデリバティブの開発はマネーが利益を求めて地球上を駆け巡る時代を作った。いわゆる「金融のグローバル化」である。巨大化するヘッジファンドが最新の金融技術駆使してグローバルに収益チャンスをねらっている。このように、現在の金融の世界は金融理論がベースとなりながらも、金融市場・取引と相互に影響し合いながら大きな変革を

遂げている。特に、金融手法の高度化がグローバル・マネーの動きを活性化し、そこから新たな金融理論が構築されるというスパイラルが続いている。

私の研究法

このように私は金融の大きな変革を踏まえて研究を続けている。理論をベースに発展した市場の活動が新たな理論の展開を導き、その理論からまた新たな市場が発展していく。この金融の発展的連鎖は限りなく続く。挑戦し続けるに十分過ぎる研究対象だ。

村井紀

文学科

恋は消えて研究が残った

私の場合、研究あるいは研究法といっても、一九六〇年代末の大学をめぐる社会変動期に、つまり二十歳前後に見つけた二、三のアイデアと経験にしがみついている、その周辺

を反復しただけのものにすぎない。そのひとつは、かなりローカルな松永茂雄・龍樹兄弟をめぐる戦争体験の問題で、国文学と詩人のことであり、西郷信綱の『詩の発生』をめぐるものだった。そこから広がったのが、折口信夫や柳田國男、そして沖縄問題である。たとえば、そのころ「われ発見せり」と思い込んだ問題が詩の滅亡というテーマだった。これらを大学の新聞や大学祭のパンフレットに書きつけ、そのころ付き合っていた二、三のガールフレンドや旧師に、ほめられるかなにかして―その娘たちの気を引くために―研究らしきものをはじめたのである。結局、わが恋は実らず、気を引くためのアイデアだけが残り、それを厭きもせずに、他の枠組みで考えなおし、ずるずる引きずり、仕立て直して、いまにいたっている。

そのころ―もはや時効に属するが―友人のレポートの代筆や卒論の下請けをやり、幅を広げた。このときの経験はまず研究書を片っ端から読むということだったが、期限のあるバイトとして、もつとも効率のよい卒論制作術だった。作品よりも、作品研究を読む、これは本末転倒ではあるが、考えてみれば、研究の手順として、当然のことなのである。

わずかなアイデア・疑問、自己の経験（傷痕・トラウマ）を大事にすること、反復をおそれぬこと、たとえば浅田彰

の『構造と力』などによって根本的に問題が解体分析されつくされていても、ひるまぬこと、本居宣長の『初山踏』ではないが、うまずためまず、シコシコと…である。

山崎秀雄

経営メディア学科

独善を排し、早起きをする

わたしの専門領域は、広くとらえれば経営学である。経営学というのと、とかく「お金儲けのための学問」とみられがちであるが、その認識は必ずしも正しくない。J.L. マッシーはマネジメントを「他人を通じて物事を処理すること」と定義した。多様な個性を持つ人々の活動をいかに調整し、企業の成長・発展へと向かわせていくか。これが経営学を探究する者にとっての一つの大きなテーマとなる。つまり経営学は、血の通った生身の人間（あるいはその集合体としての企業）を対象とした学問領域といえる。

なかでも現在最も関心のある研究テーマは、企業における

イノベーションのマネジメントである。現代企業において、イノベーションは異質な組織メンバー間の相互作用のなかから生まれ、そうした組織学習の過程で蓄積された知識やスキルがさらなるイノベーションの源泉となる。概略このような仮説のもと、イノベーションを実現する組織プロセスの解明に取り組んでいる。この点に関心を抱いたのは、ひとつには大学・大学院の指導教授の影響、もうひとつには前職での経験（某民間企業に勤務し、そこで新たな事業を始動させ、実現することの重要性和難しさを同時に痛感したこと）が背景にあるのだろう。

イノベーションという、どちらかといえば派手なイメージのテーマを取り扱っている割に、研究方法はいたって地味でオーソドックスなものである。それは、「組織能力」「組織学習」「創発戦略」などのキー概念にフォーカスした先行研究サーベイに基づく理論的枠組みの構築（仮説の構築）と、アンケート調査結果などの一次データに基づく実証分析（仮説の検証）の地道な積み重ねである。本来「わたしの研究方法」をご披露するのがこのパンフレットの趣旨と聞いているが、上記のとおりそうした名目をことさらに掲げて紹介できる特色は何もない（大変心苦しく思いつつ、この原稿を書いている）。強いて書くとするならば、わたしが研究を進める際の

は、研究を進めるうえで極めて貴重である。その時間を有効に使うには、早起きが一番である。最近では清掃や警備のスタッフの方々にも顔を覚えていただけたのではないかと自負している。

最後に、早起きも含め、わたしの研究の進め方はおおむね指導教授の「まね」である。ある高名な僧侶がテレビで次のような趣旨のことを言っていた。「まねは三日でやめれば三日坊主だが、棺桶に足を突っ込むまで続ければ本物になる」。わたしも貫き通して本物にしたいと思っている。

山本吉左右

名誉教授

「野の学問」を続けていきたい

今回、「わたしの研究法」について書くように求められた。私が自分の研究法を強く意識したのは、一九七〇年前後の、いわゆる大学紛争と深い関係がある。学園紛争という形で表現される学生たちの苛立ちは、私には痛いほど分かるような

留意点を二点ほどあげておきたい。ただし大変稚拙な内容であるため、できればさっと読み流していただけると幸いである。

第一に、独善的にならない、という点である。指導教授からよく「タコ壺に入るな」と注意を受ける。前述のように、経営学は生身の人間・現実の企業が対象の学問であり、そこではさまざまな定性要因を定量的に分析し、それを経営学的にみて無理のないよう解釈することが求められる。独りよがりではその解釈を誤ることが多い。また、一人で考え込んでいても新たな発想は浮かびづらい。他者と議論し、意見を求め、それに対して謙虚に耳を傾けることが必要である。このことを常に心がけ、実践しているつもりである。

わたしが参加する研究グループでの実証研究（企業へのアンケート調査）は、この二〇〇六年度調査で十二回目を数えた。毎回、質問票設計のための理論的枠組み作りから集計したデータの分析・解釈にいたるまで、メンバー全員で侃侃諤諤と意見をたたかわせている。そうしたなかで新しい視点がみつき、自分の研究にフィードバックできることが多い。新鮮なインプットなくしてアウトプットはない。とても大切な場である。

第二に、早起き、である。講義や会議が始まるまでの時間

気がした。その苛立ちを、学問の問題として根源に立ち返って主題化することが大学教師に要請される課題だと思った。たまたまその頃、私は文学科のカリキュラム委員長に選ばれ、委員の方々と議論を重ね、その結果を「文学科の精神とカリキュラム」として、七一年春の文学科教員合宿で報告したのを覚えている。そして私は、その精神を自らの研究法として実践してきたと思う。

誰しも自身自身の体験を振り返ってみると、それまでは無意識であつたとしても、それにこだわり続けている体験があるはずだ。そのこだわりを意識化し、それを凝視し続けること。これは学問以前のことだが、これのあるなしでその学問の質が大きく変わらなうと思う。私の場合、最終講義のパンフレット『セリフ考』で書いたような体験が、「声の文化」の問題を喚起した。同時にそれはイエ（家）とその文化の問題でもあり、ハイカルチャーとローカルチャーの問題でもあり、階級の問題でもあつた。こういった問題が鋭く露呈されたのが敗戦直後という時期であつた。そういう意味では、今日でも私は敗戦直後を生き続けている。自分の生きた時代の体験にこだわりの続けることが、かえって、次代や後世の人びとに鋭く問題を提起することになると考えている。このように自分の主題とする問題を自分の体験や生活の中に発見させるの

が文学科のプロゼミの役割であった。

自分が主題とする問題がおぼろげにでも見えてくると、アンテナを張り巡らしてさまざまな情報を収集し、その問題をさらに深めるのに良さそうな鉱脈に楔を打ち込むのだ。私の場合、それが説教節だった。説教節をゼミで取り上げたのは七一年度。当時説教節は、一部の人びとの間では研究されていたものの、一般には文学研究の対象でしかなかった。しかし、私には重要な鉱脈に見えた。それはローカルチャーに属しており、したがってまた声の文化に属している。そしてその担い手は被差別民であった。説教節の文章の作られ方 (composition) を知るために、学生たちを動員して替女歌を採集し、伊那の立石村にはいつて近世には説教の徒であった家の調査を行った。フィールドは調査者にさまざまな技能と知識を要求する。古文書の整理・撮影・解読の技能、あるいは拓本やインタビューの技術等々。地方史や地誌的な知識や民俗に関する知識等々。それらを学生たちとともに学んでいた。そして幸いなことに、私の周りには「生な資料」が蓄積されていた。その資料の中にドブブリと身を沈めて、ほのかにさしてくる光を頼りに、言語化し論理化して論文に書いてゆく。これが私の研究方法なのだ (この比喻は七一年に既に用いたもので、それで研究者と対象との関係を暗示し

たつもりだが、今、説明するには字数が足りない)。

このように私自身の研究の中に学生たちを巻き込み、その中で自分自身を鍛え、同時に学生たちをも鍛えてゆくのがゼミであり、学生たちにも同様に資料を発見させて、論文を書かせていくのが卒業論文である。こういったのが初期の文学科の教育方法であった。

こんなことを書くとき若い先生方や学生たちは「何と牧歌的なことか!」と呆れるだろう。あるいは素人のたわごと一笑に付すかも知れない。今日では、それほどまでに学問や研究ということが、自明になってしまった。お陰で学術研究はたいへん盛んだし、優れた研究もたくさん発表されている。何よりも有り難いのは良質の資 (史) 料集の出版だ。一九七〇年代と違って学問とは何かと根源的に問い直しては落ちこぼれる。決められた路線を疑わずに突っ走って競争に勝たねばならない、というわけだ。七〇年代はいわば「裂け目の時代」であった。その裂け目からさまざまな問題性が噴出していった。したがって素人の学問や野の学問にも世間は好意的であったし、可能性も感じさせた。

当時と今日では、大学が社会的に果たす役割がすっかりと変わったと思う。それについては多くを語るまい。しかし、今日でも変わらないのは、学生たちは生身の生きた存在だと

いうことだ。まだ短い人生だとはいえさまざまな体験をし、その中に何かしら問題があることに気づいているはずだ。それに教師が手を貸して問題を主題化させること、その問題に勇敢に立ち向かって探究に導くこと、そして既知と未知との臨界に身を置いて、新しい価値の出現に立ち会わせること、これこそが学問の出発点であり、今日でも必要なことだと信じている。

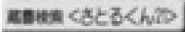
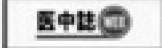
そして私は野の学問をこれからも続けていくだろう。批判的言説は使わない積もりだが、しかし、そのこと自体が世の中のいわゆる学問についての一定の批判になることを願っている。

データベースを効果的に使うためのヒント

データベースの中には、研究テーマを広げたり、検索結果を保存したりするなど、便利な研究補助ツールが備わっているものがあります。

ピックアップ機能／書誌データの保存

検索結果の中から、希望するデータだけを抽出、もしくはテキストデータとして出力・保存することができます。

	ピックアップ	データ出力
	○	○
	×	○ 出力は詳細情報画面から。
	○	○
	○	○ 参考文献目録の体裁でエクスポートする機能もあり。

アラート機能：新着情報をお知らせ



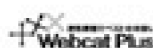
キーワードや雑誌タイトルなどを事前に登録しておく、それらに関する新着情報が、電子メールアドレスに自動的に送信されます。

シソーラス：キーワードの拡大縮小



単語の上位/下位関係、部分/全体関係、同義関係、類義関係などによって単語を分類し、体系づけた辞書。
自分が思いついたキーワードを出発点に、より精度の高い検索をすることができます。

連想検索機能：関連するキーワードを提示



検索語として入力したキーワードから、関連性の高い単語を自動的に切り出し、それを含む図書を検索します。また、検索結果の中で「関連ワード」を提示してくれるので、より自分のイメージに近い言葉で再検索することもできます。

わたしの研究法

二〇〇七年三月二〇日発行

監修 津野海太郎

編集 『わたしの研究法』編集委員会

発行 和光大学附属梅根記念図書館

〒一九五―八五八五 東京都町田市金井町二一六〇

TEL 〇四四―九八九―七四九四
FAX 〇四四―九八九―二三五〇

主要四紙(朝日・読売・毎日・日経)の所蔵状況

タイトルや年代によって、縮刷版やデータベース(CD-ROM/DVD-ROM、オンライン)など、様々な形で利用提供している。

朝日	縮刷版	東京朝日新聞 1888.7-1926	朝日新聞 1934-
	DB	朝日新聞縮刷DB 1926.12-1934	CD-ASAX 1945-1995
読売	縮刷版		読売新聞縮刷DB 1945-
	DB	明治の読売新聞 1874.11-1912	大正の読売新聞 1912-1926
毎日	縮刷版	昭和の読売新聞 1926-1970	読売新聞記事DB 1985-
	DB		読売新聞縮刷DB 1985-1997
日経	縮刷版		読売新聞縮刷DB 1985-
	DB		読売新聞記事DB 1985-

※ 2007年4月1日現在の大学の状況です。

縮刷版 DB 記事検索DB(CD-ROM) 記事検索DB(オンライン)

日本の地方新聞・専門紙・スポーツ新聞:

→日経テレコン 21 [代行検索]で検索・本文閲覧ができる。
(ex.)「神戸新聞」「日刊工業新聞」「デイリースポーツ」など多数。

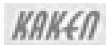
「New York Times」・「Wall Street Journal」:

→ProQuest Academic Research Library で提供されている。
* New York Times(検索・本文);Late Edition (East Coast), 1980-現在
* Wall Street Journal(検索・抄録);Eastern edition, 1984-現在

世界の新聞を調べる:

→ABYZ News Links (<http://www.abyznewslinks.com/>)
世界各国の新聞リンク集。各国の代表的な新聞だけでなく、地方新聞にいたるまで細かく網羅されている。

研究動向を調べる

	〔科学研究費補助金採択課題・成果概要データベース〕 (http://seika.nii.ac.jp/) 文部科学省及び日本学術振興会が交付する科学研究費補助金により行われた研究の当初採択時のデータ(採択課題)と研究成果の概要(研究実績報告、研究成果概要)を収録したデータベース。科学研究費補助金は全ての学問領域にわたって幅広く交付されているので、我が国における全分野の最新の研究情報について検索することができる。
	 〔民間助成決定課題データベース〕 (入口は[NII-DBR:学術研究データベース・リポジトリ]) 民間の学術研究助成団体(助成財団)が、学術研究振興を目的として研究者に交付を決定した課題を収録。助成対象者の氏名、所属・職名、助成課題、助成金額、助成金を交付した財団名などが、データとして収録されている。[NII-DBR]で一括検索可。

研究者情報を調べる

	〔研究開発支援総合ディレクトリ(ReaD)〕 (http://readjst.go.jp/) 国内の大学・公的研究機関等に関する機関情報、研究者情報、研究課題情報、研究資源情報を網羅的に収集・提供。
---	--

自宅から学内限定データベースを利用するには

VPN 接続サービス

インターネットを利用して、自宅等から学内ネットワークに接続できるようにするサービス。これにより学内のコンピュータからしか利用できなかったサービス(図書館で提供しているオンライン・データベース、学内のファイルサーバ等の利用や学内限定のホームページなど)にアクセスすることができます。

→詳しくは、情報センターまでお問合せください。

	〔CNKI 中国学術情報データベース〕 (http://cnki.toho-shoten.co.jp/kns50/) - 中国(台湾・香港以外)発行の雑誌や、全国紙・地方紙・専門誌などの新聞、250の機関が認定する学位論文などを収録している。 - 検索や検索結果一覧、抄録までは無料。
	〔韓国学術・学会誌電子ジャーナル〕(http://kiss.kstudy.com) - 韓国学術論文や雑誌のフルテキストデータベースサービス。 - 検索、書誌情報までは無料。
▶論文を直接購入する 研究費などを活用することで、必要な情報を入手することができます。	
	〔雄松堂学位論文センター〕 (http://www.dissertation-yushodo.jp/menu.html) - UMI 学位論文の検索・購入ができる。 *UMI 学位論文: 米国で受理された最初の博士論文(1861年、エール大学)から現在までのほぼすべての博士・修士論文の情報が提供されている。学位受理機関:世界約1000機関
	〔ingenta connect〕(http://www.ingenta.com/) 26,000タイトル以上の学術雑誌の目次速報データベース。原報も購入できる。 1988年以降の記事検索が可能。

新聞記事を調べる

新聞 全文記事検索データベース

朝日新聞	〔朝日新聞戦前紙面データベース〕(CD-ROM)<図書館 PC> - 昭和元年～9年(1925～1934)までの朝日新聞の紙面そのまを閲覧、印刷できる。 - 記事(広告含む)の見出しや本文中のキーワードで検索可。
	聞蔵Ⅷ 〔聞蔵Ⅷビジュアル for Libraries:朝日新聞記事データベース〕 (http://www.wako.ac.jp/library/search/database/asahi2_gate.html)<学内限定> - 朝日新聞縮刷版(1945～1984):記事検索、紙面イメージ閲覧ができる。 - 朝日新聞(1985年～当日の朝刊):記事の検索、本文・紙面イメージ閲覧ができる。「アエラ」、「週刊朝日」の記事検索・本文閲覧もできる。

読売新聞	〔明治の読売新聞〕 〔大正の読売新聞〕 〔昭和の読売新聞:戦前Ⅰ、戦前Ⅱ、戦後Ⅰ、戦後Ⅱ〕 (CD-ROM)<図書館 PC> - 明治・大正・昭和合わせて、1874年(明治7年11月2日創刊号)から1970年(昭和45年)までの記事と紙面をデータベース化。 - 新聞広告も検索できる。
	 ヨミダス文書館 〔ヨミダス文書館:読売新聞記事検索データベース〕 (https://db.yomiuri.co.jp/bunshokan/)<学内限定> - 読売新聞(1986年9月～当日の朝刊)の記事が検索でき、本文が読める。 「人物データベース」では現代のキーパーソン約2万2000人を収録。 「The Dairy Yomiuri」(1989年9月～)も利用できる。
日本経済新聞	 日経テレコン21 〔日経テレコン21 限定メニュー版〕 (http://edu21.nikkeimm.co.jp/)<学内限定> 1975年～現在までの日経四紙(日本経済新聞・日経産業新聞・日経流通新聞・日経金融新聞)の記事検索、本文閲覧ができる。 - 企業情報や財務・人事情報、マーケット情報、POS情報な幅広いジャンルの情報収集にも役立つ。
	 日経テレコン21 〔日経テレコン21 フルメニュー版〕 <代行検索・一部有料> 「限定メニュー版」に加え、全国紙、地方紙、業界紙、日経BP社の雑誌の記事検索ができる。 - 企業検索では、日経会社プロフィールのほか、東京商工リサーチ・帝国データバンクの企業情報、財務情報、信用情報、決算情報、M&A情報などが検索できる。
萬朝報	〔萬朝報(よろずちようほう)〕 (CD-ROM)<図書館 PC> 黒岩涙香により創刊された日刊新聞「萬朝報」第1～7718号(明治25年11月1日～大正3年12月31日)を収録。 *萬朝報: 小説家・翻訳家・新聞記者であった黒岩涙香が明治25年に創刊した新聞。当時、政財界著名人生活の暴露キャンペーン・翻案小説などで人々の関心を得て発行部数を伸ばした。

	[Webcat Plus]: 大量の情報の中から、「連想検索機能」を使って、必要な図書を効率的に探すことができるシステム。内容や目次情報も見ることができる。 [KAKEN]: 科学研究費補助金により行われた研究課題や成果概要を検索できる。 [NII-DBR]: 学術研究データベース・リポジトリ。民間研究助成の研究論文や博士論文の情報などを探すことができる。
	[MAGAZINE PLUS] (http://web.nichigai.co.jp/cgi-bin/astloginip.cgi?W=WAK) ・ 日外アソシエーツ提供。 ・ 雑誌記事情報に戦後の人文社会系の年次研究報告や学術論文集情報を加えた総計 719 万件に上る国内最大の雑誌記事情報データベース。
	[大宅壮一文庫雑誌記事索引 Web 版] (http://www.oya-bunko.com/) ・ 一般誌・大衆誌を収録。研究調査対象としても活用される。
	[医中誌 Web] (http://login.jamas.or.jp/) ・ 医・薬・看護・心理学などに分野が特化されているデータベース。 ・ [CiNii] との相互リンクが開始となり、一部の文献についてはフルテキストまで参照できる。

海外文献データベースは、かゆいところに手が届く

実例・ProQuest Academic Research Library の場合

- ・ 毎日データ更新。最新号が読めます。
- ・ 雑誌記事全文の提供
学術雑誌 2,300 誌に収録された記事の索引や抄録の検索ができ、そのうちの 1,500 誌は、記事全文を提供しています。
- ・ アラート機能
キーワードや雑誌タイトルなどを事前に登録しておく、関連する新着情報が、電子メールアドレスに自動的に送信されます。
- ・ ビックアップ機能／書誌データの保存
検索結果の中から、必要な文献の情報をピックアップすることができます。そのリストを表示するだけでなく、印刷、電子メール送信、エクスポートすることもできます。

* Web ページ形式で保存

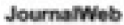
ピックアップしたリストを Web ページとして作成することができ、詳細画面や本文へそのままリンクできます。ページ編集(コメントの追加や、データ削除など)もできます。

* 参考文献の形式でエクスポート

ピックアップしたリストを、参考文献の基本形式(学術誌、一般誌/業界誌、新聞、学位論文、書籍)に合わせて出力することができます。

「私の専門は社会学で、基本的には現代の資料を使うんですが、いま、いちばん利用しているもののひとつは、データベースの ProQuest なんですよ。現物を見たり、アブストラクトを探したり・・・」 一本書「座談会」より

海外の雑誌記事・論文データベース

▶ 本文を読む／データベース検索	
 [学内限定]	[購読中洋雑誌オンライン版] (http://jweb.kinokuniya.co.jp/user/controls.php?view=userojlinker) ・ 和光大学で購読している洋雑誌で、オンラインで数年分の記事を読むことができるタイトルをまとめている。
 [学内限定]	[ProQuest Academic Research Library] (http://proquest.umi.com/login) ・ 米国 ProQuest Information and Learning 社が作成した記事索引、全文データベース。 ・ 雑誌や新聞の抄録・フルテキスト・画像イメージを、検索・閲覧できる。
 [学内限定]	[JSTOR] ・ 米国の非営利団体 JSTOR 提供。 ・ 人文系(社会学・芸術学・経済学など)のコレクションである Arts & Sciences I-IV Collection が利用でき、計約 500 タイトルを初号から(過去 1 年～5 年の最近発行の号は除く)閲覧できる。
 [代行検索]	[First Search] ・ 米国 OCLC 提供の総合データベース。 ・ 北米の大学図書館の蔵書検索(WorldCat)や雑誌の目次情報の検索(Contents First・ArticleFirst)など、多数のデータベースが利用可能。

施設・設備案内

研究空間 in 図書館

図書館では、研究に必要な施設・設備の利用提供もおこなっています。
資料群と空間を有機的に活用しながら、研究活動にお役立てください。

ひとり用の研究空間を贅沢に使う—研究個室

4F奥にある研究個室は、論文執筆するときに利用できる一人用の閲覧室。
申込制で3時間ずつ(延長可)利用できます。
情報コンセントが使えますので、パソコンを持ち込めばオンライン・データ
ベースの検索もできます。



部屋が広く 資料をたくさん持ち込めるし、誰に
もじゃまされない空間なのでいいですね。

2007 年度、新しいマイクロ・リーダーが増設されます

従来の機能のほか、パソコンに接続して「マイクロのデータをスキャンして
取り込む」機能が追加され、画像や PDF ファイルとして保存できるようにな
ります。

* PDF 形式で保存する際には OCR テキストデータを付加できますの
で、全文検索も可能となります。

施設のご案内(一部)

研究個室 (4F・2 部屋)	・ 申込制。3時間単位の利用(延長可)。 ・ 曜日・時間を指定しての連続予約可。 ・ 情報コンセントあり。
教職員閲覧室 (4F)	・ 教職員の共同利用スペース。教職員であれば誰でも利用で きる。
共同研究室 (1,2,3F)	・ 12 名までのグループで共同研究ができる。 ・ 各部屋とも、視聴覚資料(ビデオ・DVD・LD・CD)の利用可。
マイクロ・ ルーム (1F)	・ 事前申込制で、本学所蔵資料のほか、持込のマイクロフィル ム、マイクロフィッシュの利用可。 ・ プリントアウトでき、デジタルスキャナを使うとパソコンへの取り 込みもできる(PDF・JPEG など)。
A.V.Library (4F)	・ 図書館資料や持込の資料を個別ブースで視聴。 * A.V.Library の資料は共同研究室でも利用可能。

データベース・電子ジャーナル・Web サービス

データベースは研究生生活のパートナー

「24 時間アクセス」×「本文まで見られる」=∞ (無限大)

オンライン・データベースは、見たい文献を見たいと思ったときに調べられる
ので、研究のアイデアがひらめいた時や、関連する情報を耳にした時に、
先行研究でどこまで進んでいるのかすぐに確認して、自身の構想につなげ
ていくことができます。

本文まで Web 上で見られるデータベースであればなおさら、思考が中断さ
れず、効率的に研究を進めることができます。複写依頼などの時間や手間も
かかりません。

論文・記事を調べる

国内の雑誌記事・論文データベース [学内限定]



【GeNii】(<http://ge.nii.ac.jp/>)

- ・ 国立情報学研究所(NII)が提供する学術コンテンツの総合
検索窓口。以下のデータベース[CiNii・WebcatPlus・
KAKEN・NII-DBR]を統合検索する。
- ・ 検索までは自宅からでも可能。

自宅からでも CiNii の全ての機能を利用することができる ID サイトライセンス個人 ID のご紹介

- ・ 自宅の PC など、学内 LAN に接続していない端末でも、本学の
利用環境(年会費無料、学会誌のうち CiNii が「許諾」を受けてい
る論文の本文表示など)と同じように利用できます。
- ・ 有料の論文本文を、安価な価格で利用することができます。

▶ 申し込み手続

学内 LAN に接続している PC から、「CiNii 利用申請」のページ
(<https://register.ci.nii.ac.jp/userregist/userTypeSel.do?lang=ja>)にアクセスして、登録してください。

* ID の有効期限は利用開始日から年度末(3 月 31 日)まで。
新年度には、再度申請が必要です。

【CiNii】: 国内の学術論文を中心に検索。無料公開されている論
文もある。

資料入手サポートサービス

海外の資料もお届けします

国内はもちろん、国内で見つからなかった本や雑誌も、あきらめないでご相談ください。英国図書館や北米・韓国の大学図書館ネットワークを駆使して、資料入手をサポートしています。

図書館では、2005 年から北米・日韓のグローバル ILL システムに加盟し、海外からの資料を入手しやすい環境を整備してきています。

実録・資料がとどくまで

教員の方から『改造日報』（旧日本軍が第二次世界大戦中に上海で発行していた新聞）について、資料閲覧・複写の依頼を受けたことがあります。以前、上海図書館でこの資料を発見したそうなのですが、古いものだったので複写を断られたとのこと。

調査開始

(1)国内の所蔵状況

国内では国会図書館しか所蔵がなく、他の刊行年のものが存在するかどうか、確証を得られず。

(2)世界の所蔵調査——その 1[北米編]

First Search で北米の図書館の所蔵を調査したところ、ワシントン大学など、2館で所蔵があることがわかる。ついでに Google も検索し、ハワイのマノア大学の所蔵も確認。

(3)世界の所蔵調査——その 2[上海図書館編]

上海図書館の所蔵がどうなっているのかについても調査。
Web 上では確認できなかったため、レファレンス担当者に英文メールにて調査依頼したところ、「原紙で保存しているが、紙やマイクロフィルムへの複写・複製は難しく、カメラでの撮影のみ可能（ただしやや高額）」との返答あり。

結論

結局、国内・北米・上海とも、所蔵が確認できたマイクロフィルムは、どれも所蔵年がほぼ同一であったことから、原本（おそらくマイクロフィルム）は同じだったのではないかと推察。“国内の”所蔵館である国会図書館にマイクロフィルムの複製依頼を出し利用提供につながった。

調査完了

本学に所蔵のない資料の入手方法（学内教員向けサービス）

購入希望図書 (リクエスト)	・新刊書はもちろん、絶版になった図書などは、古書店を調査し購入している。 ・洋書は入手に時間がかかるので、早めの手続きが必要。 *CD-ROM、DVD-ROM、ビデオ、DVD などの資料も希望を受け付けている。 *雑誌は継続購入のため、毎年7月に次年度分の購入タイトルを図書館委員会で検討している。
相互貸借図書	・所蔵している他大学図書館や国立国会図書館から借受けることができる。 ・図書館内での閲覧となる。 ・コピーは可能（特に指定がない場合）。 *グローバル ILL: 日本に所蔵のない場合は、海外の図書館を調査し利用提供している。 *町田市立図書館の協力貸出: 借受図書は、館外貸出で利用することができる（貸出期間:3 週間）。
文献複写	・図書の一部・雑誌論文など、文献のコピーを取り寄せることができる。 *料金は無料（専任教員） *教員ポストデリバリーサービス: 届いたコピーは、希望があればサロンのメールBOXで受け取ることができる。
紹介状	・他大学図書館の利用（新着雑誌で文献複写ができない資料や、何冊も通覧したい場合等）には、訪問利用するための「紹介状」を発行している。 ・紹介状と身分証明書で利用できる。 ・現在は、紹介状がなくても身分証明書だけで利用できるなど、それぞれ利用形態が違っているので、事前の調査が必要。

▶申し込み手続

図書館3Fカウンター、またはメール（図書館ホームページの案内に沿って）で申し込んでください。

図書館提供、研究活動支援サービス案内

図書館を使いこなす

図書館員を使いこなす

【レファレンスサービス】

情報・文献・情報源の調査・提供や、各種データベースの使い方・図書館利用法のご紹介などを行っています。受付は3Fカウンター、またはメールにて。

レファレンスカウンター
受付時間

月～金 8:50～19:00
土 8:50～16:30

(授業期間中)

【教職員向けガイダンス】

図書館利用案内、各データベースの使い方講習など、ご要望に応じて実施しています。

レファレンスはとても身近な研究サポート

どこの図書館で資料を入手できるかということだけではなく、あるテーマに関する文献は存在するのか、そのテーマに関する他のアプローチはないだろうかといったご質問もお受けすることがあります。

「いろんな文献を紹介していただいて、
参考になりました！」

「おかげで無事原稿が仕上がりました」

など、利用者の方からの声が励みになり、「これからも、きちんとした回答をお届けしなくては」と身がひきしまります。

学部・学科に即して主題を担当している図書館員を中心に、さまざまなご質問に対応していますので、気軽に活用してください。レファレンス質問をしていただくことが、図書館自身の成長にもつながります。